大切なモノ

影雅　羅尉弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大切なモノ

【Ｎコード】
Ｎ５９６９Ｏ

【作者名】
影雅　羅尉弥

【あらすじ】
普通の人間、園山美空と北崎来夏。獣人の藤原桐亜に鳴神清羅と椎名緋華李。
種族の違う仲間達。それぞれの抱える傷。過去。……まあ全然シリアスじゃないけどね！

俺の周りは

櫻木町（さくらぎまち）の約三分の一の広さを誇る「黄鶯学園（こうおうがくえん）」。周りを森に囲まれ、そこでは小中高の生徒達が学問を学びにやってくる。そして、その広大な学園は入学式と同時に、新学期という儀式を行っていた。

「っていう冒頭聞くとさ、なんかシリアスっぽくね？」

俺は前の席に座る長い耳と尻尾を生やした獣人、キリアに話しかける。

「何がだよ」

そっけなく答えるキリア。茶色がかった髪に、茶色の目。おまけに獣人なので、獣のような毛色だ。

「あー、そういやもう二年なんだな」

「さっきからお前は何なんだ？」

「いや、感慨深くなっただけだ」

「しかし、俺ら全員同じクラスだったとはな」

「ホントだな。ま、知らない奴ばっかよりはいいんじゃねぇか？」

「……まあな」「おいそこの二人組ー。お喋りはよそでしなぁ」

教壇の上から声がかかる。教師だったら最悪の対応だ。

「北崎。お前なんでそこにいる？」

教壇に立っていたのは俺と同じ人間、北崎がいる。

「んー？　聞きたいかい？」

「……早く言えよ……」

北崎は大きく息を吸って宣言した。

「……何となくだっ！」

「やっぱりか！」

「おいライカ。そろそろ担任来るんじゃねぇか？」

「おっとー。マジ？　んじゃ戻ろっと」

そういって北崎は短めの金髪を揺らしながら小走りで大人しく席

に戻っていった。
「はぁ。全くあいつは何がしたいんだか……」
「さぁな。あいつの考える事は分からねぇからな」
「確かに……」
呆れながら頬杖をつく。
「……つーかさ」
「あ？」
「俺らの周り、知り合いばっかじゃね？」
「……まあな」
前にキリア、俺の左隣には先程の北崎、おまけに右隣には緑色で、一本のほつれもない糸のような髪を肩に広げて眠りこけている獣人、鳴神もいる。いずれもよくつるむ、友人ばかりだ。
「……なにかしらのご縁だろ。ラッキーだと思え」
「そういうもんかな」
ちなみに俺の席は一番後ろなので三方を囲まれている形になる。
「ほらほら二人とも！　担任がくるぜぇ？　お喋りはまた後でな。そしてミソラ、セイラを起こしてあげな」
「へいへい。……おい鳴神。おーきーろ」
「んー……」
「ほら起きろって。担任来るぞ」
「……ふぁぁ」
まるで本物の獣のように欠伸をする鳴神。
「……おはよ」
「おはよう。ほらシャキッとしろって。つか、なんで新学期初日から寝てんだよ」
「……昨日寝てなくて」
「なんで」
「……緊張してて」
今時珍しい奴もいたもんだ。新学期で緊張するとは。
「皆さん。席について下さい」

丁度先生が入ってきた。結構年齢はいってて、優しそうなイメージの男性教師だ。
「ではこれからＨＲを始めます」
それからは定番とも言える担任紹介があり、時計の針は十一時を指していた。
「では今日はこれで終わりなので各人帰る用意をして下さい。寮を使っている方は部屋が移動しますので昇降口にて確認下さい」
「……キリア。お前は寮か？」
「ああ。ここからは遠いんでな」
「そういえばそうだったな」
キリアとは小学からの仲でよく遊んでいた。因みに、北崎も小学から、鳴神は中学からつるんでいる。
「じゃあ、見に行くか。俺も寮だし」
「……私も寮」
鳴神が話に入ってくる。
「おいおい。私を忘れてもらっちゃぁ、困るねぇ」
「なんだ。結局みんな寮か」
「そーなるねぇ」
みんなで教室を出て、部屋割りを確認しにいく。

「やっぱり同じ部屋か！」
何となく予想はしてたけどな！
「おー。セイラと私も同じ部屋だぜ？」
「何だこの法則」
「……運命共同体？」
「人生十六年目にして早くも終末確定！？」
いやまあ、こいつらでも悪くはないが。
「じゃ、私達はあっちだから、セイラ、行こうか！　ミソラ！　キリア！　また明日！」

「おう。また明日な」
「早く行こうぜ。疲れちまった」
「お、おう。じゃあ行くか」
二人並んで廊下を歩く。男子寮は昇降口を出て左側だ。
荷物を受け取り、割り振られた部屋を目指す。
「えーっと……。二階の一番端っこだな。ここだ」
「ふぅん……。ホテルみたいなところだな」
周りを見渡して見ると、清潔感のある白い壁に掃除の行き届いた廊下。しかもおまけにカーペットだ。一年の時は普通にマンションぽかったしなぁ。大変だろうな。維持費。
「こりゃ、慣れるのに時間掛かりそうだな」
「確かにな。よし、開いた。入るぞ」
扉を開ければ、予想した通り、ホテルの一室のようなレイアウト。わざわざダブルベッドで御座います。男二人なんですが？
「机はちゃんと二つあるみてぇだな」
「ああ、勉強机っぽくねぇ位高級そうだな。予算ちゃんと回ってんのか？」
軽く机を叩いてみる。何となくだが。
「んじゃ、荷物まとめるか。キリアはそっちのクローゼット使えよ」
「ああ」
荷物を引っ張り出して、クローゼットに詰めていく。中々面倒な作業だ。
「……よし、大体片付いたな」
そういやご飯は……。やっぱ一年の時と同じで自炊か？
「おいキリア。お前自炊できるか？　出来ないなら俺がやるぞ？」
「……じゃあお前やれ」
「……分かったよ」
言うんじゃなかったな。余計な面倒事押しつけられた。
「仕方ねぇ……。まあ、今日はご飯もねぇし……ってそうだよ！買い出し行かなきゃじゃねぇか！」

早速仕送りを使っちまう訳か。
「金はどうすんだ？」
「二人でワリカンな」
「ち。まあいい。じゃあレシート持って来いよ」
「おう。行ってくる」
軽く手を振って部屋を出る。他の生徒達も買い出しに行くようで、廊下には何人か生徒がいた。

ここには、人間と獣人の二種類の「種族」がいる。
一つは人間。一般的に知能に優れ、政治等、戦略的なものが得意だ。
もう一つは獣人。一般的に運動能力に優れ、スポーツでは、上位のほとんどが獣人で埋まっている。
だが、勿論これらには例外も存在する。例えばセイラだ。あいつは獣人にして、運動能力、知能共に高い数値を出している。
前にも言ったが、俺とライカは人間、キリアとセイラは獣人だ。
少し前は差別もあったが、現在は改善された。

「……取り敢えず昼は……軽めにするか。よーし全部揃ったな。戻るとするか」

別に種族があっても、小説で読むような魔法もなければ異世界の生物と戦う訳でもない。当たり前の日々を過ごすだけだ。今までも、これからも

図書委員って……

翌朝

朝食を作り終えた俺はキリアという獣を起こすため、寝室へ向かった。

「おいキリア。おきろー……って本当に獣みたいに寝てやがる。獣人ってこんなに動物みたいなのか？」

「……うるさい」

唐突に声が返ってくる。

「うお！　お前おきてるなら言えよ！」

「結構前からおきてたな」

「だったらふとんから出ろ！」

「……あーめんどくせ」

「そういうなって。学校自体はそんなに悪くも無いだろ？」

「そうだけどよ……」

取り敢えず食べた俺は部屋へと戻り、準備をする。

「早く食っちまえ。遅刻するぞ？」

「ああ」

その内カチャカチャと食器を片付ける音がして、すぐにキリアが部屋へ戻ってきた。

「……よし、キリアも準備ができたら行くか」

「ああ」

ゆっくりと準備をするキリア。まあ、別に急がなくても間に合うし。

暇なので、とりあえず俺は本でも読むことにする。

「……おし。準備出来たぞ」

教室につくとすでに鳴神達は席に着いていた。

「ってまた鳴神は寝てるのか。どんだけ寝たりないんだよ」
「まあまあ、セイラはお疲れなんだろうし、始業まではそっとしておこうよ」
「おう北崎。そういやお前部活の朝練は？」
北崎は吹奏楽部に所属していて、現部長でもある。セイラは硬式テニスでエース級の実力者。まあ、獣人だから当たり前なのだが。
俺とキリアは無所属。面倒なのと、キリアはともかく俺はあまり運動は得意な方じゃない。
「ああ。一昨日大会が終わったからね。束の間の休息ってやつでさー」
「はー。……どうだったんだ？　県大会には出れそうか？」
「……ふっ」
何か急に影が射した。駄目だったんだな。
「その内演奏会とか行ってみたいな。どんなもんなのか」
「おーマジ？　そりゃ嬉しいねぇ」
暇が合えばみんなで聞きに行くのもいいかもしれない。合えばだが。
「おいミソラ。お前呼ばれてんぞ」
「ん？　誰がだ？」
「放送室が」
「先生って言えよ！　……ってああ。図書委員か。そういや今週は俺らが当番だったな」
どうせ出番は放課後だし。気にするほどの事でもない。っと、先生来たな。鳴神起こすか。
「おい鳴神。もう起きろ。つーか学校で寝るならしっかり睡眠取れよ」
「……んー」
目をこすりながら顔を上げる鳴神。ずっと寝ていたせいか、おでこが赤くなっている。
「お前なぁ……。ちゃんと睡眠取らないと病気になるぞ？」

「……大丈夫」
「何が」
「……馬鹿は風邪をひかない」
「お前今学園生徒のほとんどを敵に回したぞ」
鳴神はテストじゃ百点以外取ったことが無い奴なのに。
「……ごめんなさい」
「いろいろな。はい、前を向け。そして忘れてないとは思うが今週は俺ら当番だからな」
「……分かってる」
先生が入ってきたのを確認すると、北崎は号令をかける。いつもはお調子者って感じだが、こう言うところは責任感強いからな。だからこそみんなに慕われているのだろうが。

授業も滞りなく進み、あっと言う間に放課後になった。北崎は授業終了と同時に部活へと飛んでいき、キリアは先に寮へ戻った。
「おい、鳴神。行くぞ」
「……ん」
で、図書委員で当番の俺と鳴神は図書館へと向かっていた。
「……あ、鍵忘れてた。鳴神。ちっと職員室行ってくるな」
「……先に行って待ってる」
「おう」
鳴神と一旦別れ、職員室に鍵を取りに行って戻る。図書館にはすでに二人ほど返却待ちの生徒がいた。
「すみません。通して下さい。開けますので」
鍵を開け、カウンターへと向かう。返却を終えると図書館には誰も居なくなった。
「あれ、鳴神は……？」
一瞬不思議に思ったが、トイレでも行っているのだろうと目星を付けて作業に移る。
「……ただいま」

「おう、……お帰り？」
作業を始めて三分ほどで鳴神が戻ってきた。
「どこ行ってたんだ？」
「……特に。教室に忘れ物」
「ふぅん……。ま、いいか。鳴神。この本Ｆ－２に、んでこっちは……いっぱいあるから終わったら手伝ってくれ」
「……ん」
渡した本を預かり、目的の本棚へと向かっていく。よし、俺はこの本をしまってくるか。
「えーっと……。Ａ－１－１３はっと……ここか。んで、Ｃ－３－６か……」
「……終わった」
少しして、鳴神が帰ってくる。
「おう。んじゃ、残りはカウンターに置いてあるからそれ頼むわ。あんま一気に持ってくなよ」
「……分かってる」
そう言うと、鳴神はカウンターへと向かっていった。
「……これで、終わりっと！　うし、鳴神ー。終わったかー？」
……暫く待っても返事がない。
「あれ？　おい鳴神？」
「……何？」
「うお！　お前、何でそんなとこにいるんだよ！」
鳴神は本棚の上から顔を出していた。
「落ちたら危ないぞ！」
「……大丈夫」
「何が！？」
「……本棚の上に座ってる」
「それを止めろっての！　お前は猫か！」
「……それはそれで……」
「ああっ！　考えてみればお前獣人だもんな！　半分猫みたいなも

んでもあるか！　でも止めて！」
「……分かった」
「……ふぅ」
なんか静かにすべき所で大声を出してしまった気がする。まあいいか。
「鳴神は終わったか？」
「……あと二冊」
「そっか……。手伝おうか？」
「……ん、大丈夫」
なら俺はカウンターで休ませてもらおう。そう思い、カウンターの椅子に座って鳴神が戻ってくるのを待つ。
コントみたいな会話の所為でのど乾いた。なんか買ってくるか。
「ついでにあいつにも買ってくか。鳴神。俺ちっと自販機行ってくるから」
「……私のも」
「おう。どうせいつものやつだろ？」
「……ん」
図書館を出て近くに自販機がある。そこで紅茶とミルクティーを買って戻る。
鳴神はカウンターに腰掛けていた。
「ほら。お前は紅茶だろ？　そして紅茶メーカーでも正午の紅茶しか選ばないという……」
「……私なりのこだわり。紅茶宮殿はあまり好きじゃない味」
「そうか。俺にはどれも同じに思うが」
「……甘い、無駄に」
「あ、そこを責めるんだ。俺に罪はないぞ。悪いが」
プルトップをあけると、ミルクの香りが湯気と一緒に立ち上ってくる。ちなみにこれも正午の紅茶製です。なんか他の選ぶと鳴神がうるさいから。他人のなのに。
「……どうせ放課後までして借りに来る奴なんかいないだろう。…

…暇だな」
「……返しに来る人はいる」
「まあ、確かに」
返しに来る人も大体最初の方だけで当番の殆どを無駄に使うだけのような気もする。
「……でも……私は……」
そんなことを考えていると、鳴神が小さな声で呟いた。
「ん？　何？」
「な……なんでもない」
「そうか。しかしまあ……ホントに暇だな」
「……うん」
なんか図書館って存在意義有るのだろうか。みんな古ぼけた本より、ライトノベルを読むと思うんだが……。
「そういや鳴神、部活は？」
「……休み」
「ああ……。そういや水曜日はいつも休みだったな……」
残りの時間をしゃべりながら過ごす。いつの間にか終了時刻が迫ってきていた。
「……そろそろ、時間」
「お、本当だな。お前は北崎と寮へ戻るだろ？　鍵は俺が返しておくぞ」
「……ありがとう」
図書館の扉を閉め、鍵を掛ける。
「じゃあな。また明日」
「……また」
鳴神と別れ、俺は鍵を返しに職員室へと向かった。
「……失礼、しました」
ふぅ。疲れた……。早く戻らないとキイラは晩飯つくれないし……。

「……ただいま」
「おう、早く作ってくれ、腹減った」
「はいはい。待ってろって」
靴を脱いで台所へ向かう。俺も少しお腹が空いてきていた。
「よし、じゃあ早く作ろう。……まずは……」
……。
「よし、出来たな。キイラ。食べるぞー」
「ああ」
テーブルに並べて、さっさと食べる。俺もキイラも、食事中は基本的に黙って食べる。
「……。ふぅ、ご馳走様」
「ご馳走様。とっとと課題やって、寝たいな。明日は中央委員もあるし」
「おう、そういえばキイラはクラス副委員長だったな」
「ああ、ライカのおかげであまり忙しくは無いがな」
「ふぅん……」
ああみえて北崎はしっかりしてるからな。きっとうまくまとめているのだろう。
「さて、じゃあ俺も課題やっちゃうか」

図書委員って……（後書き）

思ったんですが、ただの日常って結構話の展開が難しいですね。

感想、誤字脱字報告など、お持ちしております！

獣人の性質（前書き）

なんだか教科書の目次みたいなサブですが、中身は普通ですから…

…はい

獣人の性質

「……ん？」
目を開けて時間を確認すると、六時五分前を指していた。
「……目覚ましより前に起きちまったな。まあいいや。朝ご飯作るか」

キリアと朝食をとり、仲良く登校……でもない。ぶっちゃけ獣人って結構睡眠時間を必要としているので、ご機嫌は最悪である。
「くそっ、獣人の事も考えて登校時間を決めろってんだ」
「ていうかさ、獣人って1日どの位寝てるの？」
「……休日の俺を思い出せ」
「……なるほどな」
休みの日は夜九時に寝て、起きたのは昼過ぎだった。なんかもう、寝過ぎなのだが。
「でもお前、他の獣人みたいに授業中とか、休み時間とかに寝てないよな」
「ああ。休みの日に纏めて寝ちまうんだよ。だからまあ、休日の俺よりは獣人は一日十時間寝るのが普通だな」
「へぇ……」
獣人の中には、鳴神のように休み時間だけ寝る者、喋りたいとか言って授業中に寝る者、午前中一杯か午後一杯寝続ける者がいる。
と言っても、鳴神のような獣人は学年でも数えるほどしか居ない。そのせいで成績が悪くなっていくのもまあ、当然と言えば当然だろう。
「そういや鳴神は部活の朝練もあったよな？　良くあいつ両立出来てるよなぁ」
「そこは個人の特徴だろ。あいつの親は獣人と人間じゃなかったか？」

「そういうもんか？　……まあ、本人に聞こうにも思い出したくもない過去だよなぁ……」
　忘れていたが、親が獣人と人間の場合、子供はそのどちらかの性質を受け継ぐ。つまり、人間の性質を受け継いだら、獣耳や尻尾は生えてこないし、逆に獣人の性質を受け継いだら、獣耳や尻尾が生えると言うことだ。
　ただ、遺伝子配列には人間と獣人の配列両方が見られ、どちらが多いかで子供が人間か獣人か決まる。
　鳴神には昔、いろいろあったのだが、まあ、その内語る日がくるだろう。

「……お、北崎。おはよう」
「おう！　キリアは相変わらず眠そうだねぇ！」
「……で、鳴神は相変わらず寝てるんだな」
「まあ、この子は寝るのが本分だから！　授業以外」
　まあ、本人がいいならそれでいいだろう。
「そうそう、北崎。ここの問題が分からないんだけど……」
「んー？　ああ、課題かぁ。えとね、ここは……こうして……」
「ほー……」
　えーまあ、恥ずかしいことだが、じつはさして頭がいいわけではない。中の上、まあ、普通レベルなのだ。って前にも言ったような……。
「……で、最後にこうすれば……ほら出来た！」
「お、ありがとうな」
「このくらいはね！」
　と言って胸を叩いた所で何かに気付く。
「どうした？」
「……ごめん。このくらいとか言って」
「俺か！？　俺のことか！？」
「さぁー誰だろうねぇ」

苦し紛れ……のふりをして目を逸らす北崎。
「仕方ないだろ？　難しいんだし！」
「うるせぇぞミソラ。新学年初っ端から騒ぐな」
「お前は俺より悪いだろうが！　少しは勉強しろ！」
「んーでも、キリアは運動能力抜群じゃない？」
「……ぐっ」
確かにキリアは成績は可哀想なくせに、運動だけは異様なまでに得意なのだ。それはすでに他の獣人の比では無いほどに。
「だけど！　普通が一番だろ！　普通が！」
「まあ、みんなそう言うよね」
「……おはよ」
そんな中、今まで寝ていた鳴神が目を覚ました。
「おう。よく眠れたか？」
「……ん。ミソラが死ぬ夢を見た」
「えぇ！？　俺なんか恨まれることしたか！？」
「……前世で嫌がらせを受けた」
「知るか！」
「騒ぐな。目立つだろうが」
言われて気付くが、皆心なしかこちらに聞き耳を立てているような気がする。
「あはは。みんなごめんねー」
流石に恥ずかしいのか、苦笑いしながら北崎は席につく。
「……悪い……」
「はんっ」
思いっきり鼻で笑われました。
「……ミソラ」
「んー？」
「……今何時？」
鳴神が目を擦りながら時計を見る。が、針がよく見えないらしい。
「えっとな……今、八時二十分だ」

「……そう」
「つか、そろそろ先生くるんだから、準備しな」
「……ん」
そう言ってセイラはロッカーへと向かう。
「さて、俺もそろそろ準備するか」

授業も終了し、下校時刻。それでも鳴神と俺は図書委員なので現在図書館にいる。
「……今日は暇だなぁ……」
「……あと四日間の辛抱だから」
「そうだな……」
その後四日間が長いんだがな……。
残りの時間を喋ったり、勉強を教えてもらいながらつぶす。
「・・・・・・で、ここに三を代入すれば……」
「……出来た。なるほどな……って今何時だ？」
壁にかかっている時計を見ると、当番の終了時刻をとうに越していた。
「おっと、もう終わりだ。鳴神、帰るぞ」
「……ん。……鍵は……」
「俺が持ってくから。鳴神は北崎を迎えにいくんだろ？」
鳴神はいつも北崎と一緒に下校している。
「……分かった。じゃあ」
「おう。またな」
鳴神を見送って、軽く周りを掃除してから図書館を出る。
「……すっかり遅くなっちまったな……」
早く帰らないとキイラが五月蝿そうだ。
そう思いながら、夜の街を駆けていった。

そんな当たり前の光景を、冷徹に見下ろす影があった。
肩まで伸ばした黒髪、切れ長の目、そして獣人であることを主張する獣耳と尻尾。
「……園山　ミソラ。篠原　キイラの数少ない友人」
その影をミソラを見下ろしながら確認するようにつぶやく。
「……まずはあれにするとしましょうか……」
少し微笑みながら、その影は言った。

生徒会と椎名（前書き）

いや、サブタイトルの単語に関連性はないですよ？
特定のラノベとは関係ないですからね？

生徒会と椎名

「おはよう」
「……おはようございます」
校門で男にいきなりあいさつされた。
「君、篠原君の友達なんだろ？　珍しい人だね。近寄りがたい雰囲気なのに」
「……はぁ」
俺が怪訝そうにしていたためか、笑いながら自己紹介を始める男。
「やぁ、自己紹介が遅れたね。僕は『榛原（はいばら）　華月（はなつき）』。一応これでも生徒会の人間なんだ。会長とかじゃないんで知らない人もいるけど。よろしくね」
榛原先輩はどうやら獣人で、好青年と言った感じだ。
「よろしくお願いします」
一応返したが……。
「それで、俺とキリアがどうかしましたか？」
「いや、最終確認みたいなものさ。じゃあ」
「では……」
……最終確認？　どういうことだ？

「なぁ」
「あ？」
「お前榛原ってやつ知ってるか？」
そう言った途端、
「お前あいつに何かされたのか？」
と言いながらキリアが詰め寄ってくる。
「いや、そう言うわけじゃ……」
「……そうか」

「どうかしたのか？」
「……しばらく俺から離れるな。そしてあいつとは関わるな。ろくなことにならないぞ」
「お、おう……？」
妙な言い回しに、少し引っかかりを覚えた。あの先輩、なにかあるのか？
「……ミソラ、おはよう」
「おう、おはよう」
そんなことを考えていると、鳴神がやってきた。彼女は席に着くと早速寝てしまう。
「ほんとに……良く寝るなぁ……」
他の獣人よりも飛びぬけて寝ているんじゃないだろうか。
「おっはよー！　今日も元気そうでなによりだー！」
次いで、北崎も朝練から戻ってくる。
「よう。北崎も元気そうで何より」
「ありがと！　キリアもおはよう！」
「ああ」
先生がくるまでしばらくいつものように駄弁る。さっきのキリアのことなど、普通の出来事のように忘れてしまった……。

「……んで？　キリアも図書室に来るのか？」
「当たり前だ。……まあ、ミソラは死んでも俺には何の影響もないが」
「おいコラ」
「……」
ちょっと言ってみたがあっさりスルーされ、何か考え込んでいるキリア。
（そろそろコイツを鍛えておくのも必要か……）
「ん？」

「いや、何でも」
キリアが何か言ったような気がしたが、どうも気のせいらしい。
そんな中、鍵を持ってきた鳴神がやってくる。
「……持ってきた」
「おう。悪いな。んじゃ開けるか」
鍵を開け……、
「あれ？開いてる？」
ようとするとそこで鍵がかかっていないことの気付く。
「どけっ！！」
「っと！？」
突然キリアが言い、中へ入る。
「おいキリア！？」
俺もそれに続く。が、中はひどい状況だった。
「っ！　荒らされてる！？」
「クソッ！」
キリアが奥へと進んでいく。見回してみると、大量の本が棚から出され。積みあがっていたり、開きっぱなしで投げてあったりしている。なんつー有様だ。
「うわっ！」
「キリア！？」
突然の声に慌ててキリアの元へと走る。たどり着くとそこには……。
「……誰？」
＞i14425—1321＜
恐らく、といか間違いようのない女の獣人。しかしその耳と尻尾、髪の毛は薄い紅（あか）に染まり、大きな目も紅い。まるで……
「……迷子？」
「ちがあう！！」
そしてかなりの低身長。
……で、キリアは？

「なあ、ここに茶色い毛並の目つきの悪いにーちゃんが来なかったか？」
「目つきが悪くて悪かったな」
「うわっと！？」
いつのまにやら後ろにキリアがいた。その後ろに鳴神もいる。
「……で、君誰？」
「紙、かせ」
「は？　紙？　……はい」
それを受け取るとちっちゃな獣人はさらさらと何かを書いた。
「『椎名（しいな）　緋華李（ひかり）？　すごい漢字だな」
「……んで？　なんでお前はここにいるんだ？」
「だってここの生徒だもん」
「「なにぃ！？」
俺とキリアで驚く。鳴神は普通だったが。
「ちなみに二年」
「同学年！？」
「二年三組にいる」
「隣のクラスだと！？」
「性別は女」
「言われるまでもない！」
「……君がやったの？」
唐突に鳴神が口を開く。
「ああ、本のこと？　そう、私が散らかした」
「なんでだよ」
「調べ物をしていたのだけれど、思ったように進まなくてね。読み漁ってたの」
「……なんか見た目小学生だけど喋り方大人みたいだな」
「確かに」
「大人だからねっ！」
「お、おう」

勢いで押し切られる。改めて見てみれば、毛並が紅いおかげで確かに大人っぽくも見える。いや、妖艶か。
「……とにかく、片付けてくれ」
「仕方ない……。まあ、私の責任だしね。やるわ」
「ところでこんなになるまで調べものって、何を調べてたんだ？」
「んー……たいしたことでもない。私の個人的な興味だから。それにしても……」
とかいいながら俺の顔を覗き込む椎名。
「な、なんだ？」
「ん！　あんた気に入った！　ちょうど私も友達がいなくてさびしかったし、私も仲間に入れてよ！」
「はぁ！？」
なんかいきなり変なことを言い出した。
「何？　もしかして人数制限とかあった？」
「いや、その仲間のくくりもどうかと思うぞ……」
「……私は構わない」
「いいのかい」
「……だってちっちゃいから」
「ちっちゃい言うな！」
そんな椎名を無視して腕から抱きかかえる鳴神。
「……軽い」
「まあね！　これでも体重には気を遣ってるから！」
もうどうでもよくなったのか、抱えられながら自慢する椎名。
「……キリアは？」
軽くあきれながらもなんとか持ちこたえてキリアに聞く。
「別に一人や二人増えようが俺はどうでもいい」
「そういうと思ったけどね……。北崎はどうする？」
「……ライカも絶対賛成すると思う」
「だろうな……」
あいつは基本来るもの拒まずって感じだし。

「俺もいいかなー。というか、ここで反対してもなぁ」
「じゃあ、改めてよろしくね」
「おう」
「……ん」
「……ふん」
こうして、新学期早々、新たな（個性的過ぎる）仲間が加わった。

計画実行

土曜日。窓を開ければ柔らかな日の光が差し込んでくる。
……相変わらずの快晴にちょっと清々しさを超えて面倒になってくる。
「……いい加減雨降ってくれないかな。あまり快晴続きだと植物が……」
そう言いながら中に戻り、朝食の準備を始める。
「……ふぁ」
「お、お早うキリア」
「ああ」
欠伸をしながらキリアが登場する。テーブルにつくとテレビをつけた。画面上に朝のニュースが流れる。
「もう少しで出来るから待ってろ」
「ああ」

朝食を食べて一息吐くと着信があった。ディスプレイにはセイラと出ている。
「おう、どうした？」
『……明日』
「は？」
『ライカが演奏会』
「あー。そう言えば北崎は吹奏楽だったな。それでどうした？　みんなで応援でも行くのか？」
『……そのつもり。明日は七時に学校前。緋華李には言ってあるから』
「おう、そうか。じゃあキリアにも伝えておくから」
『……じゃあ』
そう言って通話が終わった。

「……キリア」
「あ？」
「明日北崎が演奏会だって、知ってるだろ？」
「ああ」
「それの応援に行こうってさ」
「……俺の睡眠を奪う気か？」
なんか真面目に返された。
「いいじゃん。今日早くに寝れば」
「そうだな。俺今日は四時に寝るから」
「早っ！？」
「うるせぇ。俺には睡眠が必要なんだよ」
そこでキリアはテーブルを立った。
「どうした？」
「決まってるだろうが。課題をやっちまうんだよ」
「……ああ、なるほどな」
だったら俺もやってしまおう。そう思い、食器を洗うため席を立った。

で、次の日。
「……」
「まだ眠いのか？」
「いや、ちょっと課題がな」
「……難しかったとか？」
「……学校に置いてきちまった」
「なるほどな」
俺達の暮らす寮は一応学校内にあるが、公平性を図るために休日は教室の鍵が閉まっている。
「終わった……」
「……確かに」

少なくとも放課後残ることになるだろう。
そんなブルーな空気をスルーしながら、というか有る意味で自身もブルーなセイラが登場する。
「……おはよ」
「おう。あれ、椎名は？」
「……もうすぐで来ると思う」
そう言って俺の隣に並ぶ。というか、二人とも獣人なもんだから全然喋らない。なんだこの空気。微妙すぎる。
「きょ、今日はいい天気だなぁ！」
舌を噛みながらもなんとか話題を切り出す。でも、沈黙に慣れた獣人様はそんな俺の努力を真っ向からなぎ倒した。
「そうだな」
「……確かに」
……泣きたい。というか、この狭間から抜け出したい。
そんなことを思いながら、椎名の到着を待つ。あーそういえば椎名も獣人なんだっけか。
「おはよう！　……何ミソラ。そんな悲しそうな顔して」
「おう、おはよう。いや、別にどうこうってわけじゃないんだけど……。では、そろそろ行く？」
「……そうする」
「いいんじゃねぇか？」
「いいわよ！」
で、この獣人三：人間一というなんかもういろいろ酷い組み合わせで北崎の応援へと出発した。

会場に着けばそこはもう、人で溢れかえるようだった。それもそのはず。全国的に有名な『黄鶯学園』。そして全国大会常連の吹奏楽部の演奏会だ。中にはテレビ局の人間もいる。
「……何回か来たけど、毎回驚かされるな。この人数」
「へぇー。吹奏楽部ってこんなに凄い部活だったのね。初めて来た

からビックリだわ」
「椎名は初めてか」
「ええ。元々黄鶯学園では友達もいなかったし、興味もなかったしね」
友達がいない。そこが妙に引っかかった。いくら新学期で日が浅いといっても去年からいるはずなのだ。編入試験を受ければ別だが、その場合は事前に俺たちに連絡が回る。だが、まだ一度もなかった。
「……なあ、椎名――」
「おー！！　本当に来てくれたのかい！　嬉しいねぇ！　でー？　そのちっちゃいのが椎名ちゃんかい？」
「ちっちゃい言うな！」
「あ……」
椎名に聞こうと思ったら北崎が登場してきた。……仕方ない。また今度にするか。

「……北崎はまだ準備しないのか？」
「うん。私が出るのはこの次の曲からだから最初は袖で待機なんだー」
「へぇ……。ちなみに楽器は何を演奏するんだ？」
「んー？　私はトライアングルとか、タンバリンとか、そう言った曲のアクセント的な位置かなぁ」
手をひらひらしながら答える。でも、幾つもあるのか……。
「大変そうだな」
「そうでもないよ。殆ど単音だし、リズムさえしっかり取れれば何の問題もないよ」
「なるほどなぁ……」
「……っと。そろそろ時間だ。んじゃみんな、後でねー！」
「おう、頑張ってこいよ」
「……頑張って」
「ミスったら奢りね！」

「……せいぜい頑張れよ」
俺達の応援を受けながら、北崎はステージへ続く通路へと入っていった。
「じゃあ、俺達も席に着くか。椎名、迷うなよ？」
「なんで私が迷うのよ！」
「だって、ミニチュアサイズだし……」
「……それ、オブラートに包んだつもり？」
「いや、ちっちゃいっていうのが気に入らないみたいだから、言い方を変えてみた」
「うっるさーーい！！」
大声で否定（？）する椎名。明らかに椎名の方がうるさい。
「……じゃあ、行くぞー」
「……分かった」
「迷うわけないからね！」
「……ふん」

それからはもー凄かった。弦楽器を使わないクラシックや、最近良く耳にするポップ系の曲、それら全てが他とは比べ物にならない程に圧倒的だった。最早高校生の部活とは思えない。
「こりゃ有名にもなるよな……っと」
飲み物が切れた。買ってこよう。
「ちょっと飲み物買ってくるから」
「……ん」
鳴神に伝え、一度会場を出る。
「流石に演奏中は誰もいないのか……」
ロビーフロアは本当に誰も居なかった。
「……早く買っちゃおう」
沢山の人がいる会場とここでは異様なまでに雰囲気が違う。少し怖くなって、自然と足が速くなる。

「……よし」
買った時、後ろで足音がした。
「ん？」
「やぁ。今日は」
「お前は……っ！？」
バチィッ
「……さぁ、これからパーティーの始まりだよ……」

守る戦い

「おい！　そっちはいたか！？」
「いないわ！　帰っちゃったとかじゃないの！？」
「あいつはそんなことをする奴じゃねぇ！セイラは！？」
「……発見出来ない。捜索網を広げるべき」
「クソッ！　絶対あの野郎だな……！」
「あの野郎って？」
「決まってんだろ！　榛原の事だ！」
言うや、走り出すキリア。
「ちょっと！　どこ行くの！？」
「あいつを探す！　お前らはライカに連絡しろ！」
「あんた一人で行く気！？」
それを無視して走っていく。キリアはあっと言う間に見えなくなった。
「……行っちゃった。セイラ、どうするの？」
「……決まっている」
何か強い意志を持った声。
「……まずはライカと合流する」
そう言ってセイラは歩き出す。
「でも、ライカは今演奏中じゃ……」
「大丈夫。すでにライカが出る曲は終了した。先生さえ説得すれば問題ない」
「そう……。じゃあ急ぎましょ」

「……はっ……くっ……！　どこ……いやがる……！」
流石に息が上がり、一度立ち止まる。
推測すれば人気のない場所……廃工場が妥当か。市内に廃工場は

2つ。……クソッ、時間がねぇ。
「……榛原、華月……！　殺してやる……！」
そう心に決め、廃工場に向かって走り出した。

「……ぐっ」
何だ……？　手が動かない……。
「おや、お目覚めかい？　もう少し寝ていても良かったものを……」
「榛原……」
「おや、だめじゃないか。仮にも僕は先輩だよ？　しかもこの状況で……。まあ、僕は気が長いタイプなんでね。運が良かったんじゃないかな？」
「何の目的で……こんな事を」
「聞きたいかい？　まあ、簡単に言うと因縁かなぁ……」
「はぁ？」
「僕とキリア君はねぇ、結構張り合ってたんだ。だけどまあ、最近全然相手してくれなくてね……」
「それでこんな事をか」
「まあそんなとこかな」
「……フッ。くく、あはははは！」
俺が笑い出すと榛原は怪訝そうな顔をした。
「どうした？　頭でも狂ったか？」
「いや、あんた達がそこまで……ぷっ……バカだったとは……あはははは！」
「……死にたいのかい？」
とうとうキレる寸前まで来たらしい。榛原が目を細める。
「無知なお前に教えといてやるよ。あいつはな――」

「あいつは誰かを守る戦いの方が数倍強いんだよ！」

バァンッ！

「何だ！？」

榛原が驚く、普段のコイツなら簡単に分かるはずだが……動揺してるな。

「見ろよ。お前が探していた相手様のご登場だ」

「ミソラ。離れるなと言っていただろうが。そうすりゃこんな面倒な……」

「でも、この人達はキリアにやられないと納得しないマゾだよ。いつかはこうなっていたさ」

捕まっているのにも関わらず普通に会話する俺をみてしばらく唖然としていた榛原だが、我に帰ると話し出した。

「やあ、キリア君。遅かったんじゃないかな？」

「まあ、ミソラなら上手く時間を稼いでくれると思ったからな。俺が動くまでも無くなったぜ」

「どういう……っ！？」

突然榛原が目を押さえる。

「ぐぁっ！　何だ！？」

更に手にも何かが当たる。まあ、俺達からすれば簡単に分かるが。

「ははっ。いい気味だ」

「貴様ぁっ！　一体何を……！」

「教えてやろうか？　エアガンだ」

「まさかっ！　キリア隊かっ！」

「正解」

瞬間、次々となだれ込んでくるキリア隊。全員エアガン所持だ。

「キリアさん。珍しいッスね。あまり戦いは好まないタイプなのに」

キリア隊の一人が言う。
「避けられない面倒事は動くべきだろ」
「まそれもそうッスね。んじゃ、後は俺らに任せて下さい」
「ああ」
「くっ。おいお前たち！　こいつらをどうにかしなさい！」
榛原の命令に、奥の方に控えていたらしい不良共がやってくる。
「……おら。怪我ないか？」
「ああ。助かった」
「これにこりたら少しは俺の命令に従うことだな」
「待て待て。俺は鳴神や北崎に害が及ばないようにしているだけだぞ？」
「だったら身体を鍛えろ」
「おい！」
俺たちのそんなやりとりを邪魔する奴が一人。
「何を余裕かましているんです！？　君たちはこの僕が！　完膚なきまでに！　捻り潰してやりますよ！！」
「……なんであいつ敬語なんだ？」
「あー……。あいつの戦闘スタイルだな」
完全に冷めている俺たちに、とうとう榛原は動き出す。
「軽口を叩いていられるのも今のうちですよ！」
榛原がすばやく間合いを詰める。
「んじゃ、任せたよ」
「ふん。勝手にくたばるなよ」
「そらっ！」
榛原の攻撃をかわすと、キリアは戦闘モードに入る。
「んじゃ、こっから本番だぜ？」

生徒会長（前書き）

いつも通り短めですが、そこはスルーで……

生徒会長

「……ふぁー……。面倒かけさせやがって……ったく」
「お前は本当に……速いな……」
榛原は十秒もしないうちに地に伏した。なんかもう、桁が違う。
「つーかこいつ本当にキリアとやりあったりしたの？」
「ん？　ああ、昔は俺も未熟だったからな……。それなりに、だ。さてと……おいお前ら。もういいぞ」
「了解ッス。またいつでも呼んで下さい」
「ああ」
手を挙げてキリア隊を見送る。
「……俺らも、戻るか」
「そうだな……明日からまた学校だし」

「ミソラー！」
教室でトイレへ向かおうとした俺は北崎に呼び止められた。
「あー？」
「新しい生徒会長が決まったって知ってる？」
「あー……なんとなくは知っていたな」
「そう？　その新生徒会長挨拶が今日の五時間目にあるんだってさ」
「なるほどなぁ……」
ここで黄鶯学園の少し変わった制度について説明しておこう。
生徒会だが、この前キリアが吹っ飛ばした書記、それと会計、副会長はそれぞれ男女一名ずつ、生徒の投票で決まる。
残る生徒会長だが、こいつに関してはちょっと特殊で、先生による投票となる。
つまり生徒会長は真に優秀な生徒が得られる称号。性格はどうであれ。去年なんかはとてつもなく根暗だった。……まあ、それでも

行事は盛り上がったが。
　そして、ここ、黄鶯学園での生徒会長になるということは、強力な権力を得ると同時に、全生徒の責任を負わなくてはならなくなる。それだけに、大学入試などでは『黄鶯学園の生徒会長』というだけでかなり有利になったりする。
「面倒くせぇー」
「まあしょうがないよ。気力でなんとかして行こうか」
「あれ、セイラは？」
「ん？　なんか隣のクラスに……緋華李かな」
「ふぅん……」
　なんの用があるのかは知らないがまあ、放っておこう。

　で、昼休み。
「よし、とりあえず午前は乗り切った……」
「午後に挨拶だけどな」
「そうなんだよなー……。どうでもいいだろー生徒会長挨拶なんて」
　俺の前に座る北崎がそれに答える。
「でもさ、本当にここ、いろいろ特別だよね」
「だな。倍率なんて良く俺たちが入れたなって感じだし」
「でもミソラとキリアは小学からここでしょ？」
「ああ。なんかの間違いで受かっちった」
「そうすると実力は本物か……」
　北崎がなにか勘違いをしている。
「お、おい。別に小学から入っているからって凄いわけでもないぞ？　他にも何人かいるし」
「ふぅん……。あ、早めに食べないと体育館に移動する時間がなくなっちゃうよ」
「マジか。おいキリア。さっさと食べちゃえ！」
「うるせぇ」
「セイラも早く食べよー」

「……んー」
その後食べるのが遅い獣人二人をなんとか食べさせ、急いで体育館へと向かう。
「……っ着いたっ！」
「……ふぁ」
ちなみに体力が有り余っている獣人は平気で欠伸なんかかましたりする。
「なんとか……間に合ったかなっ！」
「……座らなきゃ」
「あれ？」
「ん？　どうしたのミソラ」
「いや……椎名がいないな……って」
「おお。そういえば……まだ食べてるとか？」
「ええー……」
とりあえず不安は残るが指定の場所につく。程なくしてステージより前会長のアナウンスが流れた。
「……これより新生徒会長の新任挨拶を行います。新生徒会長。お願いします……」
相変わらずの暗い声色。だが、俺にはそんなことがどうでもいいほど、目の前の状況が理解できなかった。
「あ、あれ！」
「まさか……」
「……凄い」
「はじめまして今日は。新生徒会長の『椎名　緋華李』よ！」

独りの理由

「この私が！　生徒会長『椎名　緋華李』よ！」

堂々と宣言したが、全く様になっていない。どう見ても小さな子が「俺は強い！」って言っているような感じだ。少なくとも、威厳はない。

というか、三年生の方からは「かわい～」とかいう声も聞こえる。いろいろ台無しだ。

「ま、まあ兎に角！　来週からは私が生徒会長を務めます！　そういうわけで、よろしく！」

どの辺がよろしくなんだ。

「……以上、新生徒会長挨拶でした」

現生徒会長が締めくくる。椎名とかなり差がある。

「まさか椎名が生徒会長だったとは……」

「人は見かけによらないって本当だよねー」

「あ、でも図書館であんなんなってるくらいじゃ、可能性はあったかもなぁ」

「……それって直接の原因になるの？」

「いや、可能性の一部分としてだけどな？」

キリアは全く参加していないが、話しながら教室に戻る。

「あ」

唐突に思い出した。

「なんだミソラ。いきなりアホみたいな声出して。それと急に止まるな。ぶつかっただろうが」

「え？　ああ、悪い。いやさ、椎名が言ってたじゃん。『私は友達

がいないから』、とか。どういうことなのかなと思ってさ」
「そんなこと言ってたか？」
「ああ。最初に会ったときな。それで気になって何度か聞こうとしたんだけど……」
「スルーされたと？」
北崎が話に加わる。それには首を振って応える。
「なんか、タイミングが合わないというか……うまく煙にまかれたというか……。とにかく、聞き出せなかったんだ」
「……そういうことは」
「ん？」
鳴神がまっすぐこちらを見据えて言う。
「……そういうことは、聞かないほうがいい時もある」
「……分かってるよ」
やはり鳴神もなんとなく分かるのだろうか。似たもの同士。だからあんなになついているのか……いや、椎名の場合はあやすか。
「んじゃみんなで聞こっか！」
考え込んでいた北崎は唐突にそんなことを言い出した。
「「は？」」
「そうすりゃセイラも共犯じゃん？」
「そんなこと、お前らで勝手にやれ」
キリアは不参加を表明するが、
「そしたら寝させないよ？」
「……チッ」
一瞬で押さえ込まれた。
北崎の言う寝させないとは、部屋中（見えないところ）に目覚まし時計をかけて延々と鳴らし続ける仕掛けを起動させるということだ。壁は一応防音なので他の部屋には聞こえないがその分俺は次の日超不機嫌なキリアと遭遇することになる。実に北崎らしい嫌がらせだ。
「でもみんなで聞くってどういうことだ？」

「んー……。せーの！　で？」
「なにがせーの！　なの？」
「うぉ！　椎名！？」
「別にいたって不思議じゃないでしょ？　ていうか、みんな帰らなくていいの？　みんな掃除とか、もう帰ったりしてるけど」
言われてあたりを見回すと、廊下でいつまでも喋っているのは俺たちだけでなんか逆に目立っている。
「あー……そういえば、生徒会長挨拶のあとはそのまま下校だったっけねぇ……」
北崎が遠い目でつぶやく。
「で？　なんの話をしてたの？」
「いや……」
北崎の方を見てみる。頷いた。聞いていいと言っているはずだ。
「椎名はさ――」
「ひかりんはなんで友達がいないの？」
……ひかりん？
「なにそれ？」
「あだ名！　なんかこっちの方がしっくり来るから！」
「……。まあ、いいわ。それは置いておいて。なんでいないかだけど……」
その間の置きようにどうしても鳴神の言っていたようなことかと思わされる。
「……ま、単純に引っ越してきて日が浅いからね」
「それだけかよ！」
「他に何があるの？」
……ま、まあ。考えてみれば椎名はこんな容姿じゃなにかと目立つからな。孤立したりはしまい。
「いやーやっぱりひかりんは人気者だったか！　良かった良かった！」
「すげぇ脱力したけどな」

「もう気は済んだか？　さっさと帰ろうぜ」
「ん？　ああそうだな。じゃあな」
「じゃぁね」
「また明日ー」
「……じゃあ」

「……なんかバカみたいだったな」
「まあお前はバカそのものだ」
「お前にはいわれたくねぇよ。……転校生なんて知らなかったぞ」
「だが椎名を元々知らなかった俺たちだ。考えれば分からなくもないことだったな」
台詞は頭の切れそうな感じだが、こいつは底辺です。
「まあ、そんなことはどうでもいい。早く食って寝るぞ」
「作るのは俺の仕事なんだけど」
そう言って俺は先を行くキリアを追いかけた。

悪魔との契約（前書き）

今回は短いです。はい。済みません……

悪魔との契約

「さて、と。今日はどうするかなぁ……」
いつもの朝、相変わらず寝続けていたキリアをたたき起こし、窓のカーテンを開ける。
「学校行けよ」
「分かってるさ。そうじゃなくて、もっとこう……」
手でよく分からない形を作り、何かしらを伝えようと試みる。
「なあ」
唐突にキリアが呼びかけた。
「ん？」
「そろそろ黄金週間だな」
「普通にゴールデンウィークって言おうか。……で、それがどうかしたの？」
「……いや。お前なんか予定立ててやったらどうだ？」
「誰にだ」
机に頬杖をつき、窓の外を眺めながらさらに続ける。
「……みんなに。いや、特に鳴神に」
「ぶはっ！」
「唾飛ばすな。きたねぇ」
自分で爆弾を投下しておきながら他人事のように引いているキリアに突っ込む。
「何言い出してる！　なんで鳴神が出る！」
「……当たったか。お前はカマかければすぐかかるな。気になってはいるが認められない……テメェはどこのツンデレだ」
「うるせぇよ！　つか、男でツンデレはまずいだろ！　いろいろと！」
「それが好きな奴もいるんじゃねぇか？」
「ごく少数な！」

まずい。ペースを持ってかれている。
「そして何より……」
「？」
そういいながらキリアは頬杖をついていない方の手で俺を指差す。
「顔が紅い」
「お前のお陰でな！」
一旦息を整える。登校前からいい運動だ。悪い意味で。
「で？　実際気にはなってるだろ？　今更否定しても無駄だぞ」
「くっ……。あーもう分かったよ。その、ほんの少しな」
「……くくっ」
「人の秘密を吐かせて笑うな！」
なにが面白いのか、必死に笑いをこらえている。
「あー悪い悪い……くふっ。……で、だ。お前に一つ教えておいてやるよ」
「な、何をだよ？」
先ほどとは一転して真剣な顔つきに、思わずたじろぐ。
「近いうちに文化祭があるだろ？」
そう、黄鶯学園は早い時期、つまりは六月に文化祭をやってしまう。と、言っても秋にも小、中学部の文化祭があるので学園全体で見れば年に二回あることになるが。
「偶然聞いたんだが、どうやら鳴神をかつて可愛がってくれた奴が一人、この市内に住んでいるらしい」
「！　……それはつまり……」
「ああ。お前の予想通り来るだろうな。確定はしないが、恐らくもう一度……」
「……お前が手を貸してくれる、ってか？」
「ま、お前が望めばな」
つまりはキリアも下手すれば喧嘩沙汰になることを予想しているのだろう。
「だが、俺はお前たちのキューピットみたいになるつもりもねぇ。

つか、あんなキモいのなんかなりたくもねぇ」
「お前それ特定の宗教を敵に回すぞ」
「あ？　俺は恋のサタン様になってやるよ」
「もっと嫌だわ！　それ信用できるか！？」
「落着いて考えてみろ。キューピットは願いだ。だが、サタン。悪魔は契約だぜ？　確実だろ」
そういうものなんだろうか……。
だが、みんなでいればその危険性も減るだろう。鳴神を一人にしなければあまり深刻な問題でもないだろう。
「さあ、契約の時間は終わりだ。学校に行くぞ」
立ち上がったキリアはどこか楽しそうだった。

鳴神二学年での初試合（前書き）

前回と打って変わって今回長めです……

鳴神二学年での初試合

「おいキリア。さっさと起きる！」
「あー……あと二日」
「お前はどれだけ寝れば気が済むんだ！　最早死んだようだぞそれは！」
「あーうるせぇ。分かったよ後百分で手を打ってやる」
「そういう問題じゃないだろ！」
キリアから布団を奪い取る。これじゃキリアがまるで子供だ。
「つか、今日休日だろ？　いいじゃねえか寝ててもー」
「そーいう甘い考えがゴールデンウィークぼけを生むんだよ！　……あるか知らないけど」
「分かったよ起きればいいんだろ起きれば」
説得のおかげでようやくキリアがベッドから出る。
「思ったんだけど獣人て尻尾やら獣耳やら生えてんのに抜け毛が少ないな。普通の犬とか凄いのに」
「あーまあそれ自体が髪の毛みたいなもんだからじゃねぇか？」
なるほど。芯がしっかりしているってことだろう。
「他人に興味のないお前のことだから一応言っておくけど、明日は鳴神が試合だからみんなで応援行くぞ？」
「……めんどい」
「そういうと思ったぞ……。とにかく決定事項だから拒否権ないし」
「えーお前だけで行けばいいじゃねぇか」
「やだよ！　お前も引きずってでも連れてってやる！」
「あーはいはい」
面倒くさそうに返事するキリア。とりあえず朝食をとらせるためにリビングへと引っ張っていく。
「あーやめろ尻尾にゴミつく。自分で歩くっての」
「なら早く食べちゃえ。この後買出し行くからな。お前もついてく

るように」
「寝たい」
コイツ……。
「引きずっていくしかないか」
「せめてもっとマシな方法とれよ」

「ほい。これも持って」
「あー重い。ギブギブ」
「安心しろ。お前なら十分持てる量だから」
「俺蹴りは強いけど握力三なんだよ」
「じゃあ足で持て」
「無茶言うな」
下らない会話をしながらてきぱきと買い物を済ませていく。
「これで、よしっと。キリア。会計行くぞー」
「お前は何も持ってねぇくせに……」
「毎日料理作ってるんだから許容しろよ」
「ちっ」
キリアと会計を済ませると、同じく会計を済ませ、袋に荷物を入れている鳴神の姿があった。
「よう鳴神。ってお前一人なの？」
「……あ、ミソラ。……今日は私が当番」
「明日試合なんでしょ？　頑張って」
「……ん」
試合前日でも全く緊張していないかのようにいつも通りの鳴神。
少しホッとする。
「おい早く帰るぞそこのバカップル」
「なっ！　おいバカ！」
鳴神の反応をうかがうと何もないかのようにボーっと立っている。
……いや、嫌がられるよりはいいんだけれど、無反応というのもまたキツイな……。

「あれ、鳴神部活は？　前日って調整とかするものじゃないの？」
「……」
……あれ？
「おーい。鳴神ー」
「……あ」
やっと反応があった。何か考え事か？
「聞いてた？」
首を横に振る鳴神。やはり聞いていなかったか……。
「部活はないのか？」
「……午後からある。ただし自主練」
「あー。そういうことか。……ま、明日はみんなで応援行くからさ。頑張れよ」
「……ん」
先にまとめ終えた俺たちは鳴神と別れる。本当は手伝ってもよかったのだが、残念ながらというか当然というか、異性の寮へは入ることができない。
「ふぁ～あ……。さっさと帰って寝ようぜ」
「お前は本当に寝るのが好きなんだな……」
「お前は本当にバカなんだな」
「どういう意味だ！」
「別に。ほらさっさと歩け」
「お前が荷物を持ってるんだろうが！」
帰りも騒ぎながら帰っていく。実に賑やかだ。

あまり寝付けなかった俺はとりえず本を読んで過ごした。
「あー……俺生きてるよな？　これ死んでないよな？」
なんとか二時には寝たものの普段はそんなに遅くまで寝られなかったせいか、頭がボーっとしている。
「……うしっ。おいキリア！　起きろ！」
頬を叩いて気合を入れてからキリアを起こしにかかる。というか、

昨日はずっと寝ていたわけだし、一体何時間寝ていたのだろうか。
「起きてるよ」
「おう。やっぱ流石にずっと寝てたわけじゃないか」
呼ぶと案外すんなりとベッドから出てきた。起きてはいたがベッドからは出なかったようだ。
「朝飯は？」
「リビングだ。食べ終わったら準備しとけよ」
「お前もな」
「当たり前だろうがっ」
と言っても鳴神の応援なのであまり準備するものはない。
余所行きの服を着た後、キリアから食器を受け取り、洗っていく。その間にキリアに着替えてもらう。なんて効率的なんだ……。いつもはキリアが寝ているせいでここまで上手くはいかないと言うのに……。
「着替えたぞ」
「おう。こっちも終わりだ。じゃあ、集合場所へ向かうぞ」
試合会場はここからバスで三十分行ったところらしい。今から行けば集合時間には十分間に合いそうだ。
キリアと無言で横に並びながら集合場所へと向かう。横目で確認すると、音楽を聴きながら熱心に本を読んでいる。
「何読んでるんだ？」
やっと勉強しはじめたのかと思い、題名を見てみる。

『獣人向け～どうすれば睡眠時間を増やせるか～』

「だらっしゃぁぁ！！」
「うぉ！　なんだお前！」
キリアから本を奪い、ゴミ箱へ投げる。実にすばらしい角度へ吸

い込まれるように入った。
「なにサボりの本読んでるんだよ！　熱心に勉強してるのかと思った！」
「生きるために必要だろ。アレ」
「そんな生死を分ける魔法の書物じゃねぇよ！　大人になったら読め！」
そんな風に爽やかな朝にふさわしくない、というか完全に近所迷惑な会話を繰り広げていたらいつの間にか集合墓所に着いていた。
「あ、ミソラにキリア！　朝から賑やかだねぇ！」
「おう、北崎。椎名もいるな」
「ええ！　……ちなみにセイラってどのくらい強いの？」
椎名が聞いてくる。確か鳴神は……。
「レギュラーには入ってるが強いわけでもないから、普通だな」
「セイラは頭はいいけど運動は普通レベルだもんねぇ」
「なるほど……うん。セイラが何でもできる完璧獣人じゃなくて安心したわ」
うんうん頷きながら椎名が言う。
「ていうか、誰だって欠点はあるだろ。俺も料理はそこそこ出来るけど頭はそれほどじゃないし」
「それもそうね。……あ、バスが来たわ。早く行きましょう！」
「お前は無邪気にはしゃぐ子供か」
あきれながらバスに乗り込む。ここから三十分。どうするか……。
適当に窓の外を見ていると、だんだん眠くなってきた。特にやることもない俺は、それに逆らわずに眠りへと落ちていった。

「おい！　ミソラ！」
「うわっ！」
慌てて目を覚ます。目の前には三人が俺を覗き込んでいた。
「あ、生きてた」
「勝手に殺すな！」

素で驚いている椎名に突っ込む。確かに朝は俺も自分の生死を疑ったが。
「もう着いたんだから、早く降りるぞ」
「あ、もう着いたのか。分かった」
キリアに返事をし、料金をはらってからバスを降りた。

勝ちたいという、思い（前書き）

なんかもう自分でもびっくりするくらい長いです。初めてですこんなに書いたの。

勝ちたいという、思い

二学年になって初めての大会。ここでベスト８以上であれば県大会に出場することが出来る。

「鳴神、勝てるのかな？」

「さあ？　相手次第じゃない？」

北崎と椎名が話している。まだ始まっていないため、というか鳴神の緒戦は後の方なので会場から少し離れた野球場を眺めながら芝生に座っている。野球場ではどこかの学校が練習しているようで、掛け声が聞こえてくる。春先で暖かい陽気、おまけに柔らかな風まで吹いている。なので眠くなりそうだ。

「あー……のどかだねぇ……」

「お前はどこの農民だよ」

「……遅くなった」

そこへ今日の主役である鳴神が現れる。出歩いても問題ないらしい。

「おう。鳴神も座ったら？」

「……ん」

俺の隣に座ると鳴神が何かの紙を見せてくる。

「あーそれ対戦表だね？　セイラどこ？」

北崎が紙を取りながら言う。

「……ここ。１３４番。第６７試合目」

「確かここのコートは十五コートあるから……四番目かー」

「てことはまだ時間があるのね。で、セイラ。勝てそうなの？」

全くストレートに聞く奴だな……。もうちょっと聞き方があると思うが……。

「……三回戦までならいけると思う。四回戦は相手次第。一人去年県大会に行った人がウォークオーバー（棄権）したから。ただ五回戦。……このブロックには去年の第四位がいる」

「五回戦ってことは……ちょうどベスト8決定戦じゃん！　セイラ……」
そこで北崎は一旦間を作る。そして、とびきりの笑顔で言った。
「がんば！」
「他人事過ぎるなおい」
「だってー。結局行けるか行けないかはセイラ次第じゃーん？」
「ま、確かにな」
キリアが北崎に賛同する。確かにそうなんだけど。
「はぁ……。まあ、いいや。鳴神、改めて頑張れよ」
「……ん」
「ねえ」
「ん？　ってうお！　椎名いつからそこに！？」
いつの間にか俺と鳴神の間に椎名が立っていた。
「結構前からいたわよ！」
「まじか！　気付かなかった！」
「つまり私が小さいってことでしょう！」
「いや、そういうわけじゃ……」
「まあまあ、ひかりんも落着いて。ひかりんはちっちゃい方が可愛いから！　万事オッケー！」
「どこがよ！？」
騒がしい限りだが、周りにあまり人もいないために視線は気にならない。

そうして話しているうちに鳴神のオーダーがかかる。いよいよ第一試合がはじまるのだ。
「……行って来る」
「いやまあ俺達もいくけどな？」
「では私達も所定の位置につこうではないか！」
「そんなの決めてないでしょうが」
試合コートに着くと、すでに対戦相手は待機していた。

「三回戦まではあまり声張らないように。セイラは本当に応援欲しいとき以外に声張っちゃうと変に緊張して逆にダメになっちゃうから」
「分かったわ」
北崎が椎名に説明している。
コートに入った鳴神。どうやらサービス（サーブを打つ人）らしい。ラケットを構え、ボールを上げる。鳴神から放たれたボールはそれなりの速さを持って相手のコートへと飛んでいく。
「わっと」
それだけなら普通に打ち返されてしまうだろうが、鳴神が得意とするのはスライスサーブだ。ボールがコートに着いた瞬間、大きく左にまがり、相手は取れずに最初の一点を与えてしまう。
「へぇー、セイラはスライスサーブ得意なんだね」
「お、椎名よく知ってるな」
「何度かテレビでみたから」
「あー……。なるほどな。それにしても、相手は一年生っぽいな」
先ほどから見ているが、バックハンドのストローク（打球）があまり上手くない。
「これじゃセイラの相手じゃなさそうだね。良かった良かった」
北崎が腕を組みながら言う。
「そうだな。これなら問題あるまい」
そのまま何も言わず傍観していると６－０のストレートで鳴神が勝利した。
「おう！　お帰り」
「……ただいま」
楽勝だったのか、あまり息も上がっていない。
「いいウォーミングアップになったんじゃない？」
「まあ、緒戦から変に強いよりはいいか」
「じゃあこのまま三回戦まで突っ走ろう！」
「……ん」

その後順調に勝ち進んだ私は、最初の問題、四回戦に向かった。オーダーにはかつて６－２で勝った相手だ。今回も勝てるだろうが、油断はしないようにする。

「……」

試合の前にミソラが言ってくれたことを頭の中で反芻しながら、相手のサービスを待った。

……たしかこの人はフォアのロブ（高く打ち上げるボール）が苦手だったはず……。克服していなければ弱点になるから狙ってみてもいいかもしれない。

一回レシーブを返し、ロブを打ち上げる。相手は簡単にミスった。まだ克服できていないようだ。

……とても静かなコート内。いくつかのコートでは声を出したりしているところもあるが、基本的に応援以外選手は一切そういったものがない。

「セイラー！　頑張ってねー！」

軽く手を上げて応える。この試合も恐らく無難に終わるだろう。

集中的にロブを打ち続け、相手から得点を奪ってゆく。そのうち相手も諦めてきたのか私のサービスがまともに返ってこなくなった。

「あ、セイラお帰り」

「……ただいま」

試合を終え、黄鶯学園の荷物置き場に戻る途中でミソラ達がやってくる。

「ちょっと危なかったんじゃないの？」

「……６－３だから、あまり危惧する必要はなかった。問題は次の試合」

「なるほどねぇ……。あ、セイラの予想通り、その四位の人、三回戦勝ったわよ」

偵察にでも行ったのか、緋華李がそう言った。
「……分かった」
「ってことは次が本番みたいなものかな？」
「……そう」
でも、勝てるか、と聞かれたらたぶん負けると思う。
「セイラ。一つだけ言っておくわよ」
「……？」
「うん。アンタは強い！　だからもっと自信持ちなさいよ！」
「……」
「えっと……そこで黙られるとすっごい恥ずかしいんだけど」
「……ふふっ」
「笑われた！？」
いちいち面白いリアクションをする緋華李の頭に手を置く。
「……ありがとう。私も出来ることなら県大会行きたいから。私のためにも、部活のみんなのためにも」
「出来ることならじゃなくて出来る、でしょう！」
「……ん」
四回戦までくるとオーダーの回りも速く、すぐ呼ばれた。
「じゃ、今度こそ頑張ってね！　ひかりんの激励も聞いたことだし、行こうか！」
「激励……なんかいいわね！　生徒会長っぽくて！」
「そんなことでいちいち喜ぶか……」
三人のコントのような会話を背に、私はコートに向かった。……キリアもいたけど。
「……では、私からサービスで。よろしくお願いします」
「……よろしくお願いします」
手短に挨拶をすませ、ラケットを構える。……部活仲間によれば相手は唯一ボレー（ネット際で打つ打ち方）で浅く打たれると弱いらしい。ただ、ストロークが強いので不用意にこちらから仕掛ける

と抜かれるらしいが。
そう考えていると、相手がサービスを打つ構えに入る。ラケットを構えなおし、相手を見据える。
相手のサービスが放たれる。……結構重く速いが、タイミングさえ合えば問題視するほどでもない。
しばらくのラリーの後、相手のボールが浅くなった。それを同じく浅く返し、ボレーの体勢に入る。
「……っ！？」
相手はそれに対して私の方に勢い良く打ち込んできた。思わず後ろに下がる。当然、返すことも出来ず、相手の打球はストレートを抜く形でコートに入った。
桁が違う。絶対小学校からやっているような人だ。
心の中にはもう、緋華李の言葉など残っていなかった。

「相当強いな」
「そうね。私さっきあんなこと言ったけどたぶん勝ったら奇跡よ」
椎名はやはり勝てるとは思っていないらしい。それは俺も思うが……。
「やっぱり勝って欲しいよなぁ……」
「でもこの状況でどうやって……」
「わからないけど……」
すでに3ゲーム取られている……。
「ねぇ」
「ん？」
「セイラ……もうあきらめてるよね？　アレ」
北崎が指差す。鳴神はろくに動かず、その目からは勝ちたい、という思いが消えているように見える。
「あー、ホントだ。ああなっちゃもうダメだなー」
椎名が北崎に言っている。……ああ、クソッ。鳴神は勝ちたいっ

て言っていたんじゃなかったのか？　表面だけなんてあいりえない。だって、鳴神は言っていたはずだ。

自分のためにも、部活のみんなのためにも……って。

「鳴神っ！」

「……？」

「ちょっとミソラ！？　いきなり叫ばないでくれる！？」

隣で椎名が俺に言う。

「鳴神は勝ちたいんじゃないのか！」

「……でも」

「でもじゃねぇ！　どっちだ！？　勝ちたいのか！？　勝ちたくないのか！？」

徐々に周りの人が何が起きてるんだと言ったような顔をしてこちらを見始める。かなりはずかしいがもう、こうなったらヤケだ。

「……勝ちたい」

わずかに、聞き取れるかどうかわからないほどの声で、鳴神は確かにそういった。

「だったら俺らに見せてみろ！　鳴神がどれだけ勝ちたいのか！」

「そーだぞセイラ！　私達を信じなさい！」

北崎が俺に続いて言う。

「なんかもう青春とか通り越して痛い人たちみたいになってるんだけど……。もういいわ！　セイラ！　生徒会長のこの私が応援してるんだから、負けたら承知しないわよ！」

椎名まで参加してくれる。

「……分かった」

＞ｉ１５８６７―１３２１＜

鳴神は頷くと、ラケットを構えた。

「……なんだか私が悪役みたいで凄くやりづらいんですが……。ちゃんと本気でやった方がいいですよね……」

「……ごめんなさい。みんなああいう人だから」
「ああいう人は中々いませんよ。鳴神さんが少しうらやましいです」
相手は笑いかけながら言う。
「手加減なんて期待しないで下さいよ！」
「……当然」

「うわー恥ずかしかったなぁー」
「ホントに……ミソラが変なこと言い出すからよ。お陰で私達まで飛び火しちゃったじゃない」
「まー面白かったよー？　流石はミソラ！　発想が常軌を逸してるよ！」
「それ絶対ほめてないだろ」
結局鳴神は相手から一ゲームも取れずに終わった。ベスト１６。県大会には行くことが出来なかった。
「……ごめん」
「セイラは悪くないよ！　あの、あれだけ私達が青春を感じていながら『この私が、負けただとぉ！？』ってやられなかった相手が悪い！」
「ずいぶん楽しい考え方してたんだな」
「……でもみんな、ありがとう」
「お互い様でしょ！　セイラも頑張って！　次は県大会行ってよー？　最後かもしれないんだから！」
「……ん」
そうか……。二年は夏季大会が負けたら引退か……。
そんなことを考えながら、窓の外を眺めながら寮へと戻るまでの時間をすごしていた。

「……ミソラ」
「ん？」
大会から数日後、二日だけ臨時で図書室の当番となった俺達は、

また暇な時間をすごしていた。
「……本の世界だと、私達みたいに、いくつかの種族が暮らすファンタジー物の本とか見かける」
「あー……なんか魔法とか使えるような世界が舞台の本だろ？」
「……そう」
「なんか、本みたいに魔法使えるといいんだけどなぁ……」
「……違う」
「え？」
「この世界にも、魔法はある」
鳴神にしては妙にはっきり言う。
「じゃあ、どんな？」
鳴神はこちらを向くと、少し照れたようにはにかみながら言った。
「人を、夢中にさせてしまうような魔法」

文化祭一週間前　朝（前書き）

今年もまたよろしくお願いします……。

文化祭一週間前　朝

「……なるほど」
「……？」
「つまり、アレだろ？」
「……何」
何か重大な答えでも待つかのように緊張した面持ちの鳴神。
「つまりお前はそれほどまでにテニスに夢中であると」
「……は？」
拍子抜けでもしたのか、変なトーンで驚く鳴神。
「……あ、あれ？　違った？」
「……」
「頼むからその蔑んだような目で見ないでくれ……」
「……違う」
「あ、違うの？」
「ような、じゃなくてそのまま」
そっちの違うか。
「……ごめん。ミソラに期待した私がバカだった……」
「それバカにしてるよね？」
「……学年トップの頭脳をもってしても無理だって……」
「相当難問なんだな。その問題」
そう言うと鳴神はこちらを一瞥してため息をついた。
「最近鳴神俺のことバカにするよね？　いじめ？」
「……なんでもない。……人来た」
「うぉ。まじか」
それ以降は特に鳴神とも何も無く時間が過ぎていった。
『人を夢中にさせるような魔法』。鳴神は結局何が言いたかったのかは分からなかったが。

『文化祭！！』
「……」
良く晴れた朝の教室。入って早々、俺は黒板にデカデカと踊る文字に目を奪われていた。
「おっすミソラ！　今日もいい天気だよー！」
「おっすじゃねぇよ。なんだよこの黒板。つか、文化祭一週間も先なんだが？　どんだけ先走ってんだよ」
「その出し物を今日のＨＲで決めるの」
「あーなるほどなー。だったら六時間目の休み時間に書けよ。朝要らねぇよ」
「違うって！　まず朝にこれを見るでしょ？　で、生徒達は『あーそういやもう文化祭かー。今年は何やるかなー』っていうのを狙ったんだよ！」
「ほぅ。中々考えたな。確かに早めに考えておけばスムーズにいくもんだからな」
やはり頭がいいだけあっていろいろ考えていたらしい。
「そして同時に授業への集中力も奪うという画期的な……」
「消せぇっ！」
「ちぇー分かったよー。消してくるよー」
しぶしぶ黒板へ向かう北崎。なんてこと考えてやがるんだ……。
そんな朝っぱらからバカみたいなコントに付き合わされた俺は疲れ果てて自分の席へと向かう。
「……」
珍しく起きていた鳴神と目が合う。
「……おう」
「……バカ」
のっけから罵倒された。
「あのさ、俺なんかした？」
「……いや……」

「だったら普通に接してくれるとありがたいんだけど」
「それは嫌」
「即答かよっ！　普段ワンテンポ遅れて返事するやつが即答すると傷つくんだけど！」
「うるせぇぞミソラ。朝っぱらから。……あ、いつもか」
そこへ今頃席についたキリアがつっかかる。
「思ったよ！　その台詞少し前にも聞いたからな！」
「……緋華李」
「いきなり名前だけ言われてもな。椎名がどうかしたのか？」
「……昨日変だった」
「ん？　それどういう意味？」
何かあったのだろうか。というか鳴神の言う変っていうのがいまいち分からん……。
「何かされたの？」
「お、北崎。消したか？」
「当たり前でしょ。流石に先生にはばれたくないし」
「ふーん。……あ？　さっきの『何かされたの？』って何？」
「んー？　昨日ひかりんが変だったって話じゃないの？」
「いやそうだけど。なんでさっきの言葉につながる」
「いや、熱でひかりんふらついてたから。大丈夫だったのかなーって」
「ん？　まあ、いいか。てか、椎名熱出したんかい。じゃ今日はあいつ休みか」
あいつは余り病気しそうなキャラじゃないと思っていたんだが……。珍しいこともあったな。
そうだねー。と言って自分の席に着く北崎。
「で？　その椎名がどうかしたのか？」
「確かに。セイラ。なんでそんなこと……あ、ごめん。ひかりんが熱だしたこと言ったの？」
「……情報の共有。それだけ」

「「……」」
なんとも鳴神らしい理由だった。
「おぉっと。先生来るね。はいみんな！　席ついて本読むか終わってない課題やろっかー！」
「課題はやらせるなよ！」

出し物決め（前書き）

いやもうホント遅れて申し訳ないです……

無事に出せました！

出し物決め

「……と、言うワケで、だ。早速出し物を決めていくよ！　いい？
今から紙渡すからそこに希望書いて渡してー。無記入の奴は後で私が面白いことやってあげるから覚えとけよー」
……面白いことってなんだよ。つか考えてねぇ……。
「……んー……」
「なんだお前、まだ書いてねぇのか」
「……キリアは書けたのかよ？」
「当たり前だろ？」
そう言ってキリアは紙をひらひら振る。
「見せてみ？　えー……っと……『休憩所』消えろ」
キリアの紙破って投げ捨てる。きれいにゴミ箱へすいこまれた。
「あ、テメ！」
「うるせぇよ！　お前の欲望丸出しじゃねぇか！　つか、最早出し物ですらねぇ！」
「なら適当にお茶でも出しとけよ」
「接客商売で適当とかいっちゃったよコイツ！」
「で？　ならお前はなにかあるのかよ」
「ぐっ……」
たしかに文句ばかり言っていたが自分は考えていない。
「ふっふっふ。ミソラよ。素晴らしい案があるではないか」
「な、なんだよ急に」
振り向けばまあ、そこには北崎がいて。
「『喫茶店』という素晴らしいものが！」
何かを指差して宣言する北崎。
あっれー……。すっごいメジャー？　なのがきたな……。
「お前奇抜なものにするんじゃなかったのかよ」
「ふっ。甘いぜミソラ。そりゃ『～喫茶』とかはあるだろうけど純

な喫茶店はここだとある意味珍しい！」
「あー……。そういうこと……」
すっごいどうでもいいや。
「まあ、でもいいか。考えなくて済むし」
「……よし。一人道連れが出来たぜ」
「道連れ言うなよ」

「……よーし皆書いたかー？　んじゃ前に、というか私のトコに提出しなさーい」
ぞろぞろとクラスメイト達が提出していく。因みに俺、キリア、鳴神も北崎と同じ意見にしてある。皆面倒だったんだな。
「これで全員だね！　じゃ集計するよー。キリア、カモン」
北崎が手招きする。キリアは仕方なさそうに立ち上がって、集計用紙を読み上げていった。
で、結果。
・喫茶店　４２票（クラス全員）
「どういうことだァァァ！！」
「うるさいぞミソラ。叫ぶなら海でやれ」
「いやおかしいだろ！　なんで満場一致で喫茶店一択！？　どんだけ心の通じ合ったクラスなんだよ！」
「おーすばらしいじゃんそういうクラス。俺達は固い絆で結ばれてるんだぜ！」
「そういう問題じゃねぇだろ！」
「……ミソラ。ライカの根回し」
後ろから声が掛かる。最近なんか刺々しい鳴神だ。
「あ、それもそうか……」
「はっはーミソラ。今更気付いたか！」
「お前が言うなって」
「ま、とにかく……疑いようもなく喫茶店が一位ということで」
「まあ一択だからな」

「みんな協力して取り組むように。以上！」

「全く。北崎はどんだけ喫茶店をやりたいんだよ……」
「ま、あの票の数がそのままやる気に繋がってるんだろ」
確かにそうかもしれない。
「文化祭とか、どうでもいい様な気がするんだけどなぁ……」
「あいつにとっては違うんだろ。そういうの好きそうだし」
「あーそうかも」
確かに北崎はお祭り騒ぎとか好きそうだ。そう考えると北崎の態度も納得がいく。
「……でよ」
「ん？」
「……夕飯、どうするんだ？」
「ああ……そういえば……」
「買ってくか」
「そうだなってお前当番だろうが」
「馬鹿。俺が作れるわけねぇだろうが」
「だと思ったよ。行くか」
材料を揃えて、寮に戻る。
「で、何作るんだ？」
「いや、今日は適当でいいかなと。名も無き料理的な」
「廚二病」
「どこが！？　別に特殊な効果はねえぇぞ！？」
俺を無視して作り始める。
「おい待て！　どうせお前じゃ何も作れないだろ！」
「……包丁あれば十分だろ」
「鉄分しか摂れねぇよ！」
早々と包丁を構えて何かしらしようとするキリアを止める。
「もう俺やるからいいって！」

キリアから包丁を奪い、材料を取り出す。
「いいか？　お前は、ぜっっったいに、手を出すな」
「そこまで拒絶するか……？」
「いやだって何やるか分かんないしね」
「まあいいだろ。寝てるわ」
そう言ってキリアはキッチンを出て行った。

「……おら。出来たぞ」
寝るとか言っていながら結局テレビを見ていたキリアに食器運びを手伝わせる。
「……ちっとまずいかもな」
「何が？」
「輸入品あるだろ？　それが少し値上がりする可能性があるらしい」
「マジか。仕送りだって高いわけでもないのにな……」
俺とキリアを合わせてもあまり高額にはならないのが現実だ。まあ、そんなにお金は使わないんだけど。
「まあそんなに上がる訳でもないしな。危惧する必要はないだろ」
「そうか……ならいいんだけど」
「それよりも問題なのは文化祭だろ」
「そうだな……。鳴神のこともあるしな……」
「いやいやそっちじゃなく」
「え？」
なにか他にあっただろうか。

「喫茶店だと寝れねぇんだよな……」

ホール班

文化祭三日前。いよいよ学園全体でお祭りの雰囲気が漂いはじめる。
「おらそこー。そこの装飾少なくないかー？　もちっと増やせー」
「おい。なんでお前は工事の現場監督みたいになってるんだよ。おじさんみたいだぞ」
「何だね園山工作員」
「俺工作員なの！？　つか意味分かってて言ってる！？」
そして俺達のクラスも、準備を始めていた。
「うーむ……」
「どうした北崎」
「いやさ。重大かつ致命的な事項を決めてなくてね……」
「何かあったっけ？」
「メニュー」
「……あー」
確かに決めていない。というか、北崎に決める気はなかったらしい。
「あ、でも調理班が決めてるんじゃないのか？」
「あーそうか。聞いてみよ」
そう言って調理班の集まっている所に向かっていった。
「……つーか……」
ホール班って何すりゃいいの？

「で、メニューは決めてあったと。ていうか、決めてくれたと」
「うん。と言うわけで、ミソラ達ホール班は前日に買い出し……」
北崎が俯いて考え込む。
「どうした？」

「いや、……うん、加工品は明日、野菜類は明後日買ってきて貰うよ。特に一日中準備となる明後日は混むから早めに行くこと！」
「へいへい。で、他にすることは？」
「接客の練習してなさいよ」
「あー……はいよ。ホール班、集まってーっていうかなんで俺リーダーになってんだろ。まあいいや、接客の練習するぞー」
ホール班の連中が集まってくる。因みに、鳴神は装飾班。
「なんでキリアがホール班なんだろうな……」
「そりゃミソラ。キリア顔いいからね。そういう面ではセイラもいいんだけど、あの子接客無理だしね」
「おい。俺も無理だと思うんだが」
「男はクールでもいいんだけどね、セイラがホールやると特定の層しか来ないから。私そういうの狙ってないし」
「はぁ……。まあいいだろ。で、ミソラ。具体的に何するつもりだ？」
「ん？　ああ、じゃあまずは挨拶からなー」

「やべぇ。なんで俺完全に班長になってるんだ……」
班長とか決めてないのに。
「いいだろ別に。それよりホラ。さっさと帰って夕飯作れよ」
「偉っそーに……」
キリアと下校し、夕飯を作る。
「うーむ……」
「なんだ」
「いや、最近椎名見てないじゃん？　大丈夫かなーと思って」
「休んで四日だろ？　風邪だってたまにそれくらい休む奴いるぞ」
「まあ、そうかな……」
悩んでも仕方ないので、携帯から椎名のアドレスを呼び出す。学校に来るまでは止めておこうかと思ったが、ちょっと心配なので掛

けてみた。
『あい。何の用かしら？』
「おう。椎名か、ってまだ微妙に風邪声だな。大丈夫か？」
『熱自体はもう下がったんだけどね。ちょっとまだ喉痛くて。学校には行けると思うわ』
「そうか……あんま無理すんなよ」
『あんたに言われるとは心外だわ。まあその言葉、ありがたく受け取っておくわ』
「おう。じゃあな」
『学校でね』
通話が終了した。
「学校には来られるようだな」
「ああ。まあそろそろ出てこないと生徒会もまずいだろうしな」
「確かにな」
キリアは早々に夕飯を食べ終えると、さっさと部屋に行ってしまった。どうせ寝るのだろう。
「明日も準備で疲れるだろうし、俺も寝るかな……」
食器を片し、部屋へ入って軽く明日の準備をする。
そんな時、一件の着信が着た。
「ん？　北崎からか」
メールを確認する。
『ねーもう一個決めてないのあったんだけどさ。店名どうしようか』
それも決めてないのか……。
『いや俺そういうの苦手だし。てかそれくらいお前が決めろって』
するとしばらくして返信が来た。
『つれないなぁー。ま、いっか。セイラ辺りにも聞いてみるよ』
『おう。一応決まったら教えてくれよ』
『はいよ。じゃまたね』
携帯を閉じ、机の上に置く。
「……寝るか」

少し早いが、布団に潜る。

守る力

前日。ややだらだらしていた昨日とは打って変わって、皆真剣に準備にとりかかっていた。
「おいキリア！　あそこにここに書いてある野菜類があるから何がなんでもとってこい！」
「言ったな？　どうなっても知らんからな」
メモを受け取り、流れるように人を避けて目的地点に向かう。……身体能力が高いだけに無駄がない。むちゃくちゃに速い。
「よし、俺は比較的人のいない食器売り場に向かうか」
メモ通りの食器を選び、レジへ向かおうとしたとき、見知った顔を見かけた。
「鳴神ー」
「……あ、ミソラ」
ボーッとしていた鳴神がこちらに気付き、近付いてくる。
「お前何か買うものあったっけ？　つか装飾班は買い出ししないだろ」
「……ん。そうなんだけど、今朝ライカに言われた」
「ホールになれと？」
「……ん。『装飾班って良く考えたら当日仕事ないよね。って事でセイラ頼んだ』って」
「アイツ……ホント何なんだ……」
「……班長、宜しく」
「よし、まずその認識から改めようか」

「……みんな！　準備お疲れ！　けど、本番は明日からだよ！　気合い入れてけぇぇ！！」
なんか一番盛り上がってるな北崎は。ホントにお祭り好きだな。

ともあれ、全ての準備は完了だ。後は期間中儲けるのみだ。
「おいミソラ」
「ん？」
「契約を発動してやる。前に捕まった廃工場に来い」
「え、ちょ……」
言い返す間もなくキリアは去っていった。
「何だアイツ……」
キリアがいうには何か考えがあるような気もするが、とにかく行ってみないことには分からない。手短に荷物を纏めると、キリアに言った廃工場へと向かった。

「……ようやく来やがったか」
廃工場にはすでにキリアが立っていた。
「それで、こんなとこでどうするつもりだ？」
「ハッ。薄々気付いてるクセに。だがまあいいだろう。さっきも言ったろ？　契約を発動すると」
「それはこの前のだろ？　協力するってやつ」
「そうだ。だからこうしているわけだ」
「ちょ、ちょっと待った。え？　どういう事？」
「お前……まさか俺が一緒に助けてやるとでも思ってるのか？」
「それは……」
言葉に詰まる。実際そうだと思ってたし。
「甘いな。そもそも面倒くさい」
七割方そっちの理由だろ。
「いいか？　てめぇが俺に頼ってる時点でお前は弱い。本当に助けたい奴がいるなら少しは自分でもカッコ付けてみやがれ。このヘタレが」
「おい。さりげなく罵倒すんな」
「とにかくだ。てめぇも男なら少しは努力しろって事なんだよッ」

猛スピードで突っ込んできたキリアが腹部に蹴りを放つ。気付けば俺は地面に伏していた。
「ぐぅッ」
初めて喰らったキリアの蹴り。想像以上に痛ぇ。
「立て。お前にはとりあえず普段の鬱憤を晴らしたい」
「随分酷い……理由で蹴るな……」
多少痛みが収まり、立ち上がる。
「お前とは喧嘩なんてしたことないからしらねぇかも知れないが」
「……何だ」
「俺結構強いからな」
言われなくても知ってる。
「だがな。俺だって最初からそうだった訳じゃねぇ。『あるきっかけ』で俺はここまで来た。それはお前も知っている事だろ？」
「ああ……」
キリアは少し構えを解き、話し掛ける。
「ここまで言えば分かるよな？　後はそうだ。きっかけだけだ。だったら俺を敵だと思え」
「？」
「セイラを昔可愛がった奴だと思え」
そう言ってキリアは再び構えた。
「……」　こいつの言っていることは何となく分かる。後は言われたとおり実行するだけだ。
「……ハッ。中々いい顔しやがるな。それでいい。俺はお前さえ倒せばセイラも巻き込んでやるよ」
それをさせないために、今俺は、こいつと対峙しているのだ。
「……こいよ」
それを合図に、キリアの懐に真っ向から突っ込む。
「おぉぉぉ！」
拳を握り、キリアの腹部を狙って放つ。
それを簡単に避けたキリアは、太ももでまた俺の腹部を蹴る。

「ぐっ！」
体が折れた状態の俺を後ろから足払いする。
右側面をしたたかに打ちつけ、その場にうずくまる。
クソ……本当に強え……勝てる気がしねぇ……。

「おい」

酷く冷たい声。見れば、表情さえ氷のようだ。

そうだ……。こいつは本気でやってる。

不器用だから、こんな形でだけど。こいつなりに本気で考えてくれているんだ。

それなら……

俺はッ！

「くっ……ははは っ！」
「何だお前。気が狂ったか？」
ゆっくりと立ち上がる。体中痛いし、ひざも震えてる。

「そうだ……貴様には負けない。―お前如きに守るべき大切なモノは奪わせない《・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・》！」
「ハッ！　面白ぇ！　やっと言いやがったか！　それなら手を抜く必要もなさそうだッ！」　言うと同時に走り出すキリア。先程までとは比べ物にならない程スピードが上がっている。
「あぁぁぁぁあ！」　同じく、キリアに向かって走り出す。出来るだけ体勢を低くして。
キリアが蹴りを放つ。やはり速いが、それに対して、俺もキリアに蹴りを放った。
お互い当たった。でもやっぱり俺のはまるで効いていないようだ。こっちは吐き気すらしそうなのに。
倒れそうになるのを何とか堪え、さらにもう一発放つ。
「って！」
蹴りがキリアに届く前に俺の足を平手打ちした。おかげで勢いを削がれ、随分と軽い蹴りになってしまった。
やはり経験の差以上の差がありそうだ。
「どうした。あれだけ啖呵を切っておきながらもう終わりか？」
「そんな訳あるかい」
笑いながらキリアに返す。頭を切り替えよう。全神経をコイツの動きに集中させて、僅かな隙を見つけるか。最も、隙があればだけど。
キリアの攻撃はほぼ蹴り技だ。まず手はほとんど使わない。そして、足は上手く使えば手より厄介だ。共通の弱点、頭に攻撃を当てにくい為に相打ち、などが出来ない。手よりリーチが長くなるためなおさらだ。
再びキリアが蹴りを放つ。かなり速い。
わざと当たりに行く。
「？　バカかお前」
「いや……違うな」
キリアの足を思いっきり掴む。そうだ。コイツに限らず、蹴りっ

ていうのは当たった後に僅かだが力の反動ですぐに引く事は出来ない。
「そして……」
「チッ。離せバカ」
抵抗するが、絶対離さないよう押さえつける。
「分かったぜお前の弱点！」
満面の笑みで言ってやる。
キリアの足を叩きつけるように戻し、その体勢が崩れた一瞬でキリアの後ろをとる。
「チッ！　ふざけやがって！」
すぐに後ろを向こうとするが、もう遅い！
「ここが貴様の弱点だぁぁぁぁ！」
言いながら、（やっぱり恐らく）弱点の尻尾を掴み上げ、思いっきり引っ張る！
「いててて！　おいバカ！　攻撃方法明らかにおかしいだろ！？」
「うるせーこれでしか勝てねぇんだよ！」
「卑怯すぎるだろ！？」
「しかしどうだ！　もっと引っ張ってやってもいいんだぞ！」
「ふざけんじゃねぇ！　離さねぇと全てが終わったあとで殺すぞ！」
「……分かったよ」
「なんでそんなにつまんなそうな顔しやがる。ったく……こういう予定じゃなかったんだがな……」
こちらを向いて、頭を掻きながら言う。
「そうなん？　でもキリア手抜きしただろ」
「まあ、少しな。まさか足を掴んでくるとは思わなかったが」
キリアはあの蹴りの時、わざと足を引くのを遅くしていた。そうでもしなきゃ掴むことなんて出来なかったが。
「まあ、何にせよ。……中々良かったんじゃねぇか？」
「え？　ああ、そうだな」
まあちょっと終わりがアレだが、コイツが伝えたかったのはつま

り、
「守る為の力は、場合によっては単純な怒りの力なんかよりよっぽど強いんだよ」
キリアが言ったがまあ、そうだろうとは思っていた。
「じゃあお前は単純な喧嘩が弱いってことか？」
「ああ、まあな。まあ弱くなる、というのは肉体的じゃなくて精神的な意味だがな」
「ふぅん……」
何でだ。キリアの方がよっぽど頭悪いのになんか頭良さそうに見えるぞ。
「さてと」
キリアが言った。
「仕上げするぞ」
そして再び戦闘モードに入る。
「おう……ってえぇ！？　なんで！？」
「なんでってお前……」
キリアがため息混じりに言う。
「お前力なさすぎだ。よって蹴りの強化をしてやる」
えー……

「よし、こんなもんか」
「この鬼め……」
「言ってろ」
ていうか本当に強化したんだろうか……。
「おら、さっさと帰るぞ。腹減った」
「はいはい……」
そう言って立ち上がる。
ああそうだ。
「キリア」

「何だ」
キリアがこちらを振り向く。
「……ありがとな」
「……ふん。そう思うならさっさと飯作りやがれ」
「おう」
そういってキリアの後を追いかけた。

「つかさ、今何時？」
「八時すこし前だな」
「四時間近くもやってたのかよ！？」

応対方法って人それぞれだと思います

で、まあ昨日身体中痛めて帰った時には九時近くになっていたんだけれども。
ともあれ、今日が本番だ。

「うっしゃー気合い入れてけー！」
どの場面においてもハイテンションな北崎はやっぱり本番でもハイテンションだった。

調理班もいよいよ準備に追われていて。
まあホールも忙しいんだけども。

「身体が痛ぇ……。もうやだこんなの」
「何リーダーがへこたれてんだよ」
「誰のせいだ！」
予定では後三十分でこの黄鶯学園文化祭が始まるわけだ。
「三日間だろ？　やってらんねぇな……」
「そう言うなって。代わりに二日目は働かなくて済むから」
黄鶯学園文化祭では、被るような店の分散をするために、三日ある文化祭の内、一日は休みとなる。その休みが二日目なのだ。
「そうは言ってもな……」
「何かあるのか？」
「寝れないじゃん」
「結局それか！　ホント寝るの好きだな！」
それじゃただのサボリだろう。
「ほらほら二人とも！　もう始まるよ！」
北崎にたしなめられ、おとなしく着替えを始める。

「……と。こんな感じかな？」
ウェイターの制服なんて着たことないんだがな……。ってバイト禁止だからみんなそうか。影でやってるならともかく。
「おー似合ってるじゃない。少なくとも予想以上だわ」
北崎が着替えた俺を評価する。
「やっほーミソラとライカ」
「あ、椎名」
「おーひかりん復活か！　風邪は大丈夫か！」
現れたのは椎名だった。
「あれ？　椎名は班とかないのか？」
「私生徒会長よ生徒会長。他の仕事で一杯よ」
「あーそうか。文化祭を動かさないとだしな」
「ミソラはホールなのね。変な格好」
「さらりと言うな！」
「うるせぇぞお前ら」
そこへキリアが着替えてくる。
「おぉ……かっけー」
北崎がそんなことを言う。
キリアはもともと足が長いのでこういう格好はよく似合うのだろう。
「全体的に締まってる。うむ、キリアを選んで正解だったぜ！」
「うるせぇ。ったく……こんな目立つようなの着るもんじゃねぇぜ……」
「ミソラ、隠れなさい」
椎名が突然そんなことを言い出した。
「え？　何で？」
「後悔するのは自分よ……」
「悪かったなホールで！　そして俺が自ら入った訳じゃねぇ！」
「んーむ……セイラ遅いなぁー……。寝てんのかな」

北崎は一人思案顔。
「いやそんなキリアじゃないんだし」
「どういう意味だ」
「……待たせた」
丁度のタイミングで鳴神が戻ってくる。
「お、おかえりー。遅かったね」
「……装飾の最終調整をやってた」
「なるほどね。うむ。セイラもよく似合ってる。やはり私の目に狂いはなかった！」
「……余り着たこと無い」
北崎がそう言いながら後ろを見たりしている。大方誰かに着付けてもらったのだろう。
「随分大きなリボンねー。重くない？」
「……余り気にならない」
北崎の頭に黒い大きなリボンが付けられ、服装は上下黒、どちらかというとウェイトレスというよりはゴシック系の服だ。というか女子みんなそうだ。
「こんなんどこにあったんだ……」
「へっへー！　私が買った！　親に経費といって出してもらったけど」
「そこまでする事かよ……」
「だってー。ウェイターが黒だから合うのってこれじゃない？」
「纏めたかったと」
「そゆ事♪　はいみんな！　もう間もなく来るんだから気ぃ引き締めな！　頑張っていこう！」
北崎の号令と共に、開催の花火が鳴った。……流石に緊張するんですが。
新たなお客さんが現れる。俺は極めて冷静に、営業スマイルとか

いうやつで応対する。
「いらっしゃいませ。二名様でよろしいですか？」
「あ、はい」
「畏まりました。ではお席の方へご案内致します」
そう言ってお客さんを空いている席へ案内する。……自分でもびっくりするぐらい丁寧な言葉だ。
案内が一段落し、他のメンバーを見てみる。
まずキリア。
「何人だ」
「えっと……三人です……」
いらっしゃいませ飛ばした！？　アンタどういう立場だよ！
「そうか。……席に案内する」
「はぁ……」
最早接客とは言えない。ていうかあの人達先輩じゃないか！？
思いっ切りタメ口かよ！
キリアの態度に戦慄しながら、今度は北崎の対応を見てみる。
「……いらっしゃいませ。二名？」
「いや、一人後で来るから三人だ」
「……そう。こっち」
そう言ってお客さんを連れて空いている席に案内していた。
……こっちもこっちで最悪だ……。
何なんだこいつらは。敬語を知らないのか。
ここで既にやる気をなくす俺だが、呼び鈴がなったので慌てて向かった。
「お待たせしました。ご注文はお決まりですか？」
「あ、このチョコレートパフェを二つとブレンドコーヒーを二つで」
「畏まりました。ご注文の確認をさせて頂きます。チョコレートパフェを二つとブレンドコーヒーを二つ。以上でよろしいでしょうか？」
「大丈夫です」

「畏まりました。少々お待ち下さい」
……自分で言うのもなんだが、結構練習通り出来てる気がする。
注文を調理班に持って行く。
……さて、問題なのはやっぱり……。
キリアを見る。
「注文は決まったか？」
「あ、えーと特性サンドイッチを一つと、コーヒーを二つにアイスティーを一つ……」
「それでいいか？」
「え？　あ、はい」
「そうか。……少し待ってろ」
ダメだ。もう接客がどうこうじゃない。
鳴神はここまで行かないような気もするけど……。
「……注文は？」
「おう。とりあえずアイスティーを二つだけくれ」
「……ん」
「ところでさ、君名前なんて言うの？」
あ、なんかナンパされてる！　予想はしてたけど結局そうなるんだ！
さあ鳴神はどう返すのだろうか……。なんか気になってきたぞ……。
「……鳴神清羅」
「清羅ちゃんねぇ……。彼氏とかいるの？」
「……いない。でも好きな人ならいる」
え？　それ初耳ですよ？　そしてそれを見ず知らずの人に言っちゃう？
「ふぅーん……名前は？」
言われた鳴神は辺りを見回し……俺と目が合った。
しかしすぐに外し、お客さんに向き直る。いや、ナンパ野郎か。
「……言えない」

「てことはクラスメイトか……。まあいいや。じゃ注文頼んだよ」
「……ん」
なんか普通に会話してたな……。まあいいのか。
「……おーいミソラー！　これ四番テーブルに持ってってー！」
「あ、おう」
北崎に呼ばれ、調理班の作った料理を運んでいく。

文化祭一日目（後半）（前書き）

1ヶ月も経っていたっていう奇跡

文化祭一日目（後半）

「ミソラー！　こっちも運べー！」
「はいはいはい！　分かったよ！」
お客は昼を境に一気に増えた気がする。休む間もなく働く。
「……あ、ミソラ！　ちょっとこっちも来てくれるか？」
「……今度こそ注文か？」
「いや？」
「注文しないなら呼ぶな！」
おまけに知り合いが冷やかしで俺ばかり呼ぶ。全くはかどらない……。
「おら。さっさと動けよミソラ」
「お前も休憩ばっかすんなよな！」
キリアは十分程前から働いている所を見てないぞ。
「バカ。俺はラストスパートに向けて温存してんだよ」
「俺は無しか！」
「リーダーだしな」
なんだそりゃ。
とにかく、キリアもいないと回りそうもないので叩いて急かす。
「ほらお前もさっさと動け！」
「って。ったく、別に俺いなくても十分だろ？　寝させろ」
「この状況で寝たら後が怖いわ！」
「いや、俺なら気にするな。この学園の連中なんざ敵じゃねぇぜ」
「そういう問題か！」
もう仕方ないので引っ張り起こして引きずっていく。
「だからやめろっつの。分かったよやりゃいいんだろやりゃ」
丁度呼び出しがかかったのでキリアを向かわせる。
『……注文』
「えーと、アイスティーを一つ」

『……』
何も言わずにこちらへ戻ってきた。
酷い！　さっきより酷くなってる！
「……アイスティー1個だと」
「俺に言うな！　つか、応対が酷すぎる！」
「文句の多いやつだなぁ……」
「誰のせいだコラ。とにかく、今の注文を調理班に伝えてこい」
「ああ」
キリアを取り敢えず復帰させた後、流石に疲れたので俺も休憩をはさむ。
とは言っても五分程度だが。

さて、なんとか昼を乗り切り、ようやく客足も落ち着いてきた。
「うーん、今日はこれだけ儲ければ十分かな！　とゆことで最終日も頑張っていこうぜ！」
見切り早くないか？
「や、最終日も頑張らなきゃだがな、まだ今日あと三時間もあるんだが」
「いやー多分今日これ以上は期待出来ないっしょ。てことで諦めました」
潔いな。確かに余り増えないかも知れないが。
「せめて最後まで頑張ろうぜ。今見切りつけるとか色々申し訳ないから。マジで」
「勿論これからのお客さんも精一杯出迎えるぜ！　と、言うわけで、ミソラ。ガンバ」
「俺だけ！？」
北崎に背を押され、ホールに出る。……窓際、前から二列目に見知った顔があった。
「……おや、園山君じゃないか。ああそっか。キリアと同じクラス

なんだっけ」
「なんでこんな所にいるんだよ」
華月（はなつき）（苗字は忘れた）、この前の件でキリアにあっさり負けた奴だ。
「ん？　まあ生徒会の仕事だよ。別に今更どうこうって訳じゃないよ。ところで注文いいかい？」
「ん？　おう」
注文を受け、調理班に伝える。最初は警戒していたものの、どうやら生徒会の見回りとかいうやつらしい。考えてみれば華月の前にも生徒会の人間は出入りしていたし、信じてもいいだろう。
「ミソラ。後三十分ぐらいで今日のプログラムは終了だ。頑張れ」
「おい。つかなんでお前もう着替えてるんだよ」
「俺はもう上がったんだよ。半分くらいはもう上がってる」
キリアは既に制服に着替えていた。
「てことは、最終日は俺らが早上がりって事か」
「まあそうだろうな」
じゃあ、後三十分くらい頑張ってみるか。

「よしみんな！　お疲れ！　中々手応えあったし、これなら最終日も期待できるかもねー。明日は休みな訳だけど、あんまりはしゃいで最終日ダウンとかしないよーに！」
そんなアホいるのかよ……。
北崎の合図を受けて、各々帰り始める。
「ミソラ。帰るぞ」
「あ、おう。ちょっと待ってろ」
鞄に荷物を片付けてキリアの後に続く。
「眠ぃ……。俺飯いらねぇ。さっさと帰って寝る」
「はいはい。ったく。どんだけ寝れば気が済むんだか……」
寮に入ると、流石に文化祭期間中だからか、通路やロビーに人が

いた。先生も見回っているようだが。
「っち……。きゃーきゃーはしゃぎやがって……大人しく出来ねぇのかよこいつらは」
「そういう発言やめてくれない？」
目付けられるから。
「……まあ他人なんてどうでもいいが」
キリアは不機嫌そうにそういうとさっさと歩き始めてしまった。
「……明日は休みだろ？　お前どうすんだ？」
「ん？　北崎達と見て回るけど。お前は？」
「寝る」
だと思ったよ。
「ま、いいか。あ、どうせお前の事だから今いらないとか言ってても夕飯の時には腹減ったとか言うんだろうし、作っとくからな」
「……勝手にしろ」

文化祭二日目（前書き）

なんだこの量。
未だかつてない量に自分でもびっくりだ

文化祭二日目

「あ、ミソラー！　こっち！」
「ん？　おう、待たせた」
北崎、鳴神に椎名と合流する。
「椎名は生徒会大丈夫なのか？」
「ん、便利な副会長に頼んできた。まあ最も、流石に生徒会だって一生徒だからね。回ったりも出来るわ」
「なるほどな」
「まあ見回りも兼ねてよ」
という事は椎名も時間的制約はないのか。
「さってじゃ、なんかキリアいないけど行こっか。キリアには私から後でプレゼントをくれてやるとしよう」
「や、俺も喰らうからそれはやめてくんない？」
多分プレゼントとは目覚ましだろう。
「んー？　しょうがないなぁー。じゃミソラも込みで」
「酷くない！？」
「早く行こうよー。ライカもそんなのほっといてさぁ」
椎名が呆れたように嘆息する。
「そんなのって何だよ……」
「ではっ！　いっきましょうかー！」
学園祭二日目。北崎の先導によって始まった。

「うぉぉ！　ミソラ！　これやろうぜ！　つかみんなでやろうぜ！」
「お前はしゃぎすぎだろ。テンション高いなー」
「まあ好きだしね！　こういうお祭り騒ぎは！」
お前ぐらいだけどな。騒いでんの。
「ほらほら。ミソラもライカもあまりはしゃがないでよね。迷惑に

なるでしょ」
「なあ、なんで毎回毎回俺も犯人に入ってるんだ？　どう考えてもおかしいだろ」
「些細なことにいちいち首突っ込むのねーミソラは」
「お前なぁ……」
「……あ」
今まで大人しくしていた鳴神が声を上げる。
「どした？」
「……何でもない」
少し目を伏せて答える。何か見つけたのだろうか。
「そうか……。鳴神は何か見てみたいのはないのか？」
「……案内、見せて」
「ん？　おう」
そう言って持っていたパンフレットを鳴神に渡す。
しばらく思案顔して目を通し、こちらに返してから言った。
「……特にない」
ですよねー。
何となく想像通りの返答に苦笑いしながら、北崎達の方に顔を向ける。どうやらどこに行くか決めているらしい。
「どこに行くかは決まったのか？」
「んー？　おうともさ！　やっぱ文化祭っていったらこれっしょ！」
そう言ってパンフレットのある項目を指差して見せる。
「……お化け屋敷……」
普通だった。や、まあ確かに定番とも言えるほどメジャーだが。
「つーわけでレッツゴーだ！」
「結局お前に引っ張り回される訳か……」

「……で、どうやって組み分けするんだ？」
「あ、そっか。こういうのって普通二人一組か。じゃ、ミソラ。私

達全員と回れば？」
なにその斬新な組み分け。
「俺に三回も回れと？」
「まあそうなるね。だってさぁーこーんなのに、女二人とか悲しいぜ？　男一人も悲しいけど」
「同じの三回も回るのも悲しいんだが」
「あ、そこは別のにするからだいじ」
「用意周到だなぁオイ！　つか、そんなの誰も賛成しないだろ！」
「私いいけど？」
即答する北崎。
「ミソラが怖がる所見てみたいわね」
挑発的な笑みを浮かべて椎名。
「……だったら私も」
鳴神。……え？　何？　新しいイジメ？
「俺は……」
「さぁ行こう！　まず誰からにする？」
「そうねぇ。まずはライカでいいんじゃない？」
「……賛成」
「あのー……俺は……」
やっぱり無視か……。泣きてぇ。
で、そのまま北崎が一番になって、俺の意見はオールスルーで連れ込まれた。
「なんで俺は……」
「押しが足りないんじゃない？」
「お前が言えたことか！」
ライトを片手に北崎と進んでいく。
「おー！　ミソラこえー！　やっぱ文化祭っていったらこれだねー！」
「お前はどんな状況でも楽しめるんだな……」
出てくるお化け役の生徒に挨拶してみたり、セットにいちいちリ

アクションとったりと、やりたい放題だ。今の北崎、多分止められない。誰にも。
「お前もうちょっと落ち着いたらどうだよ……」
「そりゃ私には一番縁のない言葉だねぇ」
そうですかい。
「ねーミソラーこっち照らしてみー」
「ん？」
北崎が指さした方を照らしてみる。何もない。
「あっれー？　やっぱ違うかー」
「何がだ？」
「いやさー。なんか地面に頭っぽいのあったらセットかなぁーと思ったんだけど……違うっぽいねー」
「いやそれホントだったらその頭は……」
「本物？」
「でしょうね」
俺の素っ気ない反応が不満なのか、北崎は少し拗ねたように言った。
「もー。少しは怖がればいいのにー」
「生憎幽霊は信じてないんでな」
「へー。なんで？」
前へ出た北崎がこちらを向いて言う。
「まあ、説明すると長くなっちゃうからいわないが……。幽霊って完全に幻らしいしな」
「ふぅーん……。つまんない奴ー」
「お前が面白すぎるんだろうが」
周囲まで巻き込む辺り。
「私はさー。結構そういうの信じてるんだよねー」
「ん、そうなのか？　だったら悪いな。夢壊すような事言っちまって」
「ううん。大丈夫。でもさ、幽霊って確かに幻かも知れないんだよ

ね。触れないとかさ。でも、そういう話は多いでしょ？」
「都市伝説……みたいなもんか？」
「そ。自分じゃ見たこと無いけど、他の誰かが見たり、聞いたり。だから、幻だとしてもその人本人には実際にあったこととして記憶してるんだよね」
北崎が虚空を見つめながら話す。
「あ、ああ……」
いつもの北崎からは想像できないような声に思わずたじろぐ。
「？　どしたの？　ミソラ」
「いや……なんか、いつものお前じゃないような……」
「酷いなー。私だって年中無休でハイテンションじゃないんだからねー」
「あ、まあそうなんだが……」
「お？　そろそろ終わりかな？　いやー中々面白かったねぇ！」
「あ、バカ走るなって！　つか先行くなよ！」
慌てて北崎を追いかけていった。
「あ、お帰り。意外と早いのね」
「椎名か……。そうだな……早い割に疲れたぞ……」
「さーってさて！　お次は誰かなぁー？」
「もう行くのか……」
元気な奴だ。
「じゃあ、私が行くわ。なんかミソラお化け屋敷平気そうだし。代わりに私が怖がらせてあげるわ……」
「いや、訳分かんないから」
「何が？　そのままの意味だけど」
脅迫でもする気か。
「はいはい二人とも、早く次の所行くよー！」
「はいはい……」
ダメだ。北崎の体力についていけん。
「情けない声ねー。そんなに疲れたの？」

「ん？　いやまあ、精神的にというかむしろ体力的というか……」
「何それ？　変な奴」
椎名が怪訝な顔して言う。ほっとけ……。
「あ！　ミソラほらあれ！　次あそこね！」
「……って……」
どうやら次のは二クラス合同制作らしい。先程より広そうだ。
「無駄に力入れてんなぁ……」
『お化け屋敷』なんて血文字のように書かれた看板を見ながら呟く。体力的に疲れそうな予感しかしないんですけど。
「……はぁ……。ま、いいや。おら椎名。行くぞ」
「はいはい。あ、ライトとか持つようならアンタが持ちなさいよ」
「え？　いいけど」
何だ。何の伏線だ。
考えていても仕方ないので早速入ってみる事にする。
「……ライトは必要無いみたいだな」
係の人にも渡されなかったし、照明も落としてあるが薄暗く、見えないわけでは無さそうだ。
「中々雰囲気出てるわね」
「ま、そうだな……」
話しながら、迫り来るお化け役の生徒をオールスルーしながら進んでいく。……言っとくが八つ当たりじゃないぞ？　話してるから仕方なくだ。ああ。
「この暗さ……獣人にはキツいわね……」
「へぇー。なんでだ？」
「眠くなるわ……」
獣人って便利だなぁ……。
「じゃ寝てみれば？」
「なんでよ！」
「いや、椎名だったら多分ここのセットになれるぜ。人形的な」
「バカにしていると取っていいのかしら……ッ！」

「いや誉め言葉だと痛い痛い！　ちょっ分かった！　悪かったよ！」
腕を雑巾絞りされて慌てて謝る。攻撃方法も子供だな。
「まったく……」
椎名は腕を組んでそっぽを向く。
「悪かったって」
「シッ！」
そう言って椎名は俺の口を押さえる。
……鼻も、一緒に。
「ふがっ！　おひひうぃな！　ひる！　ほれひぬ！（おい椎名！　死ね！　これ死ぬ！）」
「え？　昼？　まだ早いわよ……ってちょ、くすぐった！　アンタしゃべんな！」
「ぐはっ！　誰のせいだと思ってやがる！」
椎名の手から脱出し、即座に抗議する。
「……あーあ。聞こえなくなちゃった」
「……何がだよ」
「猫の鳴き声がしたような気がするんだけど……アンタのせいで聞こえなくなっちゃったじゃない」
「俺のせいじゃないだろ。どうせセットで流してたりするんじゃないのか？」
「それもそうよね……こんな所に猫なんているわけないわよね……」
「ていうかまだ終わらないのかよー。もう疲れたよ俺。お化けも全く出てこないし……って」
あ。そういえばここお化け屋敷だっけ。忘れてた。
「お化け役の人にも悪い事したなぁ……」
ここ上級生の教室だっけ。
「早く行きましょ。ライカ達も待ってるわ」
「へーへー」
先に歩き出した椎名を追いかける。
「まったく……早く――ミソラ！　走りなさい！」

「え？　何で？」
後ろから何か大きなものを転がすような音が……。
「って嘘だろォ！？　殺す気か！」
いつの間にやら大きな玉……っつーか運動会とかで大玉転がしで使うアレそのものが迫っている。
「派手な演出っていうのを越えている！」
スリリング過ぎる！　というかやっちゃいけないのを平気でやっている気がする！
「まさか……！」
スルーされまくったから仕返しか！　なんて外道な仕返しだ！
椎名と必死になって逃げる。曲がり角を曲がったところで大玉は壁に当たり、動きを止めた。
「ひでぇ……ひでぇよ……」
「……流石に疲れるわ……」
地面にへたり込んで言う椎名。確かに体形的にキツいような気もする。
「立てるか？」
起こすために手を伸ばしたが、椎名はそれを無視して一人で立ち上がる。
「アンタに起こしてもらうほど、へばってないわよ」
「分かったよ……。そろそろ終わりだろうな。距離的にも」
「そう。じゃ早く出ちゃいましょう。こんな疲れるところ」

「お！　おっかえりー！　……って、なんで二人ともそんなバテてんのさぁ？」
「いやまあ、いろいろあってな……」
「二度と御免だわ。あんなの」
出て来ると北崎達が待っていた。
「ミソラ、ちっと休憩するかい？」

「マジか。そうしてもらえると有り難い」
「じゃーセイラはミソラが休憩してからにしよっかー」
「……ん」
鳴神が頷くのを確認してから歩き出す。
「休憩ってどうするんだ？」
「ん？　そこらの適当に買って食べるなり飲むなりすれば？　流石にお昼はまだいいでしょ？」
「まあそうだな……」
本当は座ったりした方がありがたいのだが、贅沢なことは言えないだろう。北崎の言ったとおり何か買うとしよう。
「じゃあ飲み物でも買ってくるからここで待っててくれるか？」
「りょーかーい」
一旦その場を離れ、近くにないか探してみる。
「意外と必要な時に限ってないんだよなぁ……。あ、あれっぽいな」
適当に目星をつけ、飲み物を買ってから北崎達のもとへ向かう。
「北崎。買ってきたぞ」
「ん？　おぉ、おかえりー」
「で？　これからどうするの？」
「そうだねー……。ここから少し歩かなきゃだし、移動しながら適当に回ろっか」
「おっけ」
「移動するってどのくらいなんだ？」
「そんな遠くもないよ。歩いて十分くらいかな？」
「ふぅん……ま、そうと決まれば早く行こうぜ」
はいじゃしゅっぱーつ！　と言って北崎が歩き出す。俺達も出発することにした。

そして約十分後。俺達はとんでもないものを目撃していた。
「ミソラ、ここ！」

「……うわぁ……」
恐らく長さは椎名の時とさして変わらない。だが、なんというか、次元が違った。装飾が、雰囲気が、既に学園祭というカテゴリを逸している。
「あの……悲鳴すら聞こえないんですが……」
「まあこれ一般企業枠での出店だからね。今までと同じだと思ってると後悔するよ？」
ああ、そう。これ、一般企業さんですか。じゃあ高校生の遊びとは大違いですよね。ええ。
「……面白そう」
「お？　セイラこういうの好きなのかい？」
「……ん」
鳴神が頷く。へぇ、鳴神はホラーとか好きなのか。
「なぁ。段々規模が壮大になってる気がするのは俺だけか？」
「奇遇ねミソラ。私も思っていたところよ」
もう、俺は、諦めた。というか、北崎、椎名と来て、鳴神だけ回ってやらないのは失礼な気もする。
「はいじゃ、二人とも行ってらー！　あ、ひかりん私達も行こうか！　折角だし！」
「ん？　いいわよ別に。ただ待っているのも暇だし」
北崎達も後ろに並ぶ。
「……では、次の方……」
「あ、はい」
「ここは現在二名様までのご案内とさせて頂いております。二名様で宜しいですか？」
「はい。大丈夫です」
「畏まりました。では、奥に進み下さい。会計は終了後となります」
「分かりました」
軽く会釈して鳴神と奥へと進んでいく。
「……そろそろ？」

「じゃないか？　っと。この扉を開けば始まりってことか」
『入口』とかかれたノブを回し、開けるとひんやりした空気が流れてくる。
「……おぉ」
やはり、ちゃんとした企業が手がけているだけあって、セットもいままでとは作りが違う。
「……ミソラ」
「ん？」
鳴神が少し先の曲がり角を指差す。
「……あそこを曲がってまず後ろから物音がする」
「へ？」
何を言ってるんだこいつは。
不思議に思いながらも歩みを進める。
「何もねぇか……」
そう言った途端、背後からカタ、と音がした。
「うぉ」
「……そして前を向くと」
前に向き直る。
「……お化け役の人がいる」
なんだ。鳴神はもしかして出るタイミングとかをばらしてるのか。
「……まさか、楽しみってこれのことか？」
「……ふふっ」
あ！　笑った！　やっぱそうなんだ！　それ脅かし役に失礼じゃないか！？
「お前……」
「……次、約三秒後に右からお化け」
バダンッ　鳴神が言い終わった途端に右からお化けが現れる。
「……壁の向こうから声。そこを曲がるまで。曲がるとお化け」
次々と相手のネタをばらしていく鳴神。やべぇ。つまんねぇ。
「や、あのよ鳴神。別に見計らうのはいいんだが、面白くないんだ

が」
「？」
小首を傾げて疑問顔の鳴神。
「だから、最初っから相手の手の内が分かってると面白くないからさ」
「……そう」
少し申し訳なさそうに目を伏せる。
「……じゃあ、ミソラには偽情報を教える」
「嫌がらせだろ」
その後、鳴神の偽情報に耐えながら先に進む。
しかし、それだけではなかった。
「……ミソラ。二秒後に上から物」
「本当かよ……ってうぉ」
時々本当の事をいうから厄介だ。
だが当然、鳴神の独壇場もその内終わりが来るわけで。
「……わっ」
予測していなかったのか、壁から現れた……ろくろ首？　に驚いて飛び退いた。
……俺の、方に。
「えっちょ、鳴かぐわっ！」
足をかけ違い、なんかもう、ドサッという効果音がぴったりな音と共に倒れ込む。
「……ってぇな……」
痛みをこらえて目を開ける。
「ちょっと鳴神。目は開けるな」
「……？　何で？」
お前にとって大惨事だからです。
鳴神が倒れ込んできたせいで、目を開けるとすぐ目の前に鳴神の顔があった。
どうしよ。この状況。とりあえず、鳴神を立ち上がらせないと。

「鳴神。そのまま立ち上がれ。マジで」
「……ん」
そう言って鳴神はゆっくりと立ち上がる。
「って痛い痛い痛い！　は、腹が！」
「え？」
あ。目開けちゃった。

「「……」」

しばしの沈黙。そして状況を理解したらしい鳴神は……
「……は、離れろミソラ！」
顔を真っ赤にして叫んだ。
「や、だからお前が立たないとってだから痛いぃぃ！　何だ！　腹に膝立ててんのか！？　未だかつて無い痛みが！」
「いいからっ！　早く離れろ！」
「俺の話聞いてないよなぁ！？」
その言葉でやっと自分が立たないといけないと分かったのか、ようやく立ち上がる鳴神。
「腹が……ひでぇよ……」
「……あ……えっと……ごめん」
未だに顔を赤くしたままの鳴神は頭を下げて謝る。
「いや、仕方ない……かもしんないし、大丈夫だから」
「……そう？」
上目遣いに俺を見る。……な、なんでそんな目で見る……！
「あ、ああ。大丈夫だから」
ちょっと直視できないので、目をそらして答える。
だが、どうやら鳴神はそれを痛みを我慢して目をそらしたととったらしい。
「……本当？」
わざわざ回り込んでまでして聞く。

「本当本当！　それより早く先進もうぜ！」
「……あ、ミソラそっちは……」
走り出して先を行く。右に曲がったところで、
『ははははは！』
「うぉあっ！？」
目の前を笑う何者かが横切った。
「……やっぱり来た。だから止めたのに」
「いっとくけどこれが本来のお化け屋敷だからな！　推測するのは違うからな！」
「……そうなの？」
「そうくるか……。お前はお化け屋敷をなんだと思ってるんだよ……」
「……推察力を高める場所」
「そう言うと思ってたわ！」
そう言って未だにその場にいる鳴神の所に向かう。
「つか、早く行くぞ」
「……ん、ちょっと挫いたみたいで……」
軽く足の調子を確かめる。鳴神は少し顔をしかめた。
「……痛い」
「おいおい……大丈夫か？　こんな暗いのに……」
「……ごめん」
「俺に謝ってもな……」
嘆息混じりに言う。
すると鳴神が手を伸ばした。
「……ん」
「え？　何？」
「……痛い。だから、こっちの手、持って」
「え！？」
何だこいつ。痛みでどうかなったのか。
「……ん」

なおも手を延ばし続ける鳴神。
「あ、いやその……えぇ……なにこの状況……」
「……分かった」
そう言って手を下ろしたかと思うと、けんけんをして俺の方へ来ると、腕を掴んだ。
「……よし」
「よよよ、よしじゃねぇっ！　おま、何して……！？」
「……？　何か？」
「そこで疑問顔が出来るお前は天才だよ……」
俺は限界です。精神的に。
「……そんなことより、はやく行こう」
「あ、この行動はそんなことなんだ。俺の中じゃ錯乱モノなんだけど」
そんなやり取りをしながら、二人で進む。
最も、俺はそれどころじゃなかったが。
なんか腕に感じるこの柔らかい感触は……やばい。これじゃただの変態だ。注意を逸らさねばっ！
「な、なぁ鳴神――」
話でもして気を逸らそうとする。
「……何？」
凄く至近距離に、鳴神の顔があった。
「墓穴掘ったぁぁぁ！」
すぐにそっぽを向く。クソッ！　罠だらけじゃないか！
「……大丈夫？」
「悪い……俺は大丈夫じゃないんだ……」
「……？　でも……」
「ん？　でも？」
「ミソラといると、安心出来る」
「はっ！？」
突然なんなんだ！？

そんな俺の心中も知るべくもなく、鳴神は続ける。
「……私が初めて学校に来たときも、ミソラが一番に話しかけてくれた」
「あ？　ああ……そうだったっけか……」
「……覚えて、ないの……？」
「え？　いやそうじゃなくて……。流石に一番だったかどうかなんて俺には分からないからな」
「……そっか。でも、ミソラが話しかけてくれたから、キリアとか、ライカや緋華李に出会えた」
「椎名はどっちかっていうとキリアが最初だけどな」
「……そう。そして、気になるのがミソラの呼び方」
「え？」
「……ミソラはどうして、私達を苗字で呼ぶの？　キリアは下の名前で呼ぶのに」
「いや、それは……」
「……どうして？」
「う」
まっすぐに見つめられて、言葉に詰まる。
「えっと……まあ、恥ずかしいしなぁ……」
「……私は気にしないのに」
「お前はしなくても俺はするんだよ！」
「……そう」
鳴神は前を向く。
「……まあ、それはそれで……」
鳴神が何かを呟く。
「ん？」
「……何でもない」
「そうか？」
それきり、言葉はない。
「……あ」

鳴神が何かに気付く」
「どうした？　鳴神」
「……もう少しで、終わり」
「そうか……」
「……」
「鳴神？」
僅かに、ほんの少しだけ、腕を掴む手の力が強くなった気がする。
「……もう少しだけ、こうさせていて……」
「……」
何で……鳴神が……。まさか……違う……よな？
「……お願い」
「……あ、ああ……」
曲がり角を曲がれば終わりだ。外で北崎達を待つとしよう。
とにかく、今は考えないようにしよう。うん。

自分の気持ち

「うっはー！　中々怖かったねぇひかりんよ！」
「そう？　私はそうでもなかったわ」
「あ、お帰り二人とも」
鳴神と外で待つことしばらく。北崎達が出てきた。
「いやーこれからどうしよっか！　何か回ってみるかい？」
「その前にお昼にしないか？　そろそろいい時間だろ」
「んー？」
北崎が携帯を確認する。
「十一時四十五かぁ。ちっと早いけどまあいっか！　んじゃ何食べるよ？」
「それは適当でいいんじゃないか？」
「じゃ回りながら決めよー！」
ああ……もうホントテンション高ぇ……。
「……あ。鳴神立てるか？」
俺がそう聞くと、鳴神は無言で手を出した。
……ここで？　公衆の面前ですよ？
「あ、あの北崎。鳴神支えてくれるか？　くじいたみたいで……」
「ぬっ！？　セイラ怪我したの！？　なんでどして！？」
「あ、言ってなかったっけか。ちょっとまあ、色々あってな」
「……色々？　なんだか気になる伏線ですなぁダンナ」
しまった。頼む相手ミスった。
「いやまあ、ちょっと倒れただけだ」
「どうやって？」
それを聞くか。
「鳴神が驚いてな。そのままバランス崩して」
「バランス？　そんなに驚いたの？」
う。中々鋭いところを……。流石は成績上位者ということか。

でもまあ嘘じゃないし……。
「ああ、本当本当」
「ふぅーん……。まあいいや。じゃセイラー私の肩につかまるがいい！」
鳴神は頷くと北崎の肩につかまった。
「うっしゃーじゃ出発だー！」
……食い倒れになりそうで怖いんだが。

……まあ、結局そこら辺の出店で昼食を済まし、あとはなんだか模擬的な縁日や、カジノ的な出し物などを回り、以外とあっさり二日目も終わりを迎えようとしている。
「ふぁぁ……。いやーちっとばっかし疲れたねぇー」
「悪い……俺ちっとどころじゃないかも……」
「なんだか校内全部回ったような気がするわ……」
「……限界」
「なんだー皆。明日はある意味一番盛り上がるイベントがあるではないか！」
そんなのあったっけ？
「……何だよそれ」
「え？　後夜祭」
「盛り上がるのかぁ？」
「まぁーとにかく！　その為にも体力とかその他もろもろの温存をね……うん、図る訳だよ」
とゆーことでさらばっ！　と言って鳴神、椎名を引き連れて去っていく。
「……俺、今日振り回されるだけ振り回されて終わり？」
その事実が、俺の止めとなった。
……嫌になる……。
「とにかく、もうここにいても仕方ないし、帰るか……」

大人しく帰路につかせてもらおう。疲れたし。

「……キリアー。起きてるか？」

……返事がない。寝てるのか。

「つかもしかして一日中寝てたのか？　逆によくそんな寝れるよなぁ……」

ある意味尊敬に値する。

仕方ない。夕飯を作っておくか。

そう思い、台所へ向かおうとすると、ポケットの携帯が震えた。

「メールか……」

『忘れてたけど、明日の食料、下に書いてある分買って！　みんなで分担してるから無理じゃないっしょ？　ｂｙ北崎』

下には買うリストが作られていた。

「まあ、じゃあついでに俺達の食料も買っておくか……」

財布を確認してから出発する。

……キリアは……いいか。どうせ起きないだろうし。

「うぉ。すっかり夏近い感じだなぁ」

だいぶ日も延びてきただろうか。５時過ぎでも、そこまで暗くない。

目的のスーパーに着くと、クラスメイトがちらほら見かけた。分担しているのは本当らしい。

……ま、余り面識ないが。ていうか、北崎達と行動しすぎて周りにどんな感じの人間がいるのか分からない。致命的じゃね？

「えーっと……？　まず野菜類は……」

リストと頭の中で買うべきものを決めていく。カゴは意外と早くいっぱいになっていった。

「キリアにも頼めば良かったな……」

持てるんだろうか。この量。

そんな事を今更思っても後の祭りというものだ。諦めるしかない。

手早く会計を済ませ、袋に入れる。
「……ミソラ」
「ん？　おう」
聞き覚えのある声に振り向くと思った通り鳴神がいた。
何故だろう。最近鳴神との遭遇率高いんですが。
「「……」」
……何だこの沈黙。
「あ、そういえば！　鳴神はもう足平気なのか？」
「……ん、大丈夫」
「そ、そうか……良かったな」
「……ん」
また沈黙。……俺にどうしろと。
「……あ……」
「ん？　どうした？」
「……」
俺がそう聞くと、鳴神は言いにくそうな顔をした。
「……えっと……あ……」
「あ……？」
「……明日、上手く行くといい」
……へ？
「……じゃあ」
「え？　いやちょ、待って！　どういう意味！？」
聞かず、そのまま走り去ってしまった。
「……なんだぁ？　……一体……」
心に疑問を抱いたまま、元来た道へと帰る。

「……ふぅ……ただいまっと……」
「今まで行ってたのか？」
「うぉ。キリアも起きたのか」

「ああ……」
「なら丁度いい。夕飯にすっぞ」
部屋へ上がり、支度を始める。
……作りながらどうしても今日一日の事がフィードバックされる。
まぁ、北崎や椎名もあるが、一番記憶が新しいのもあるのか鳴神のことが頭から離れない。
……余計な場面もあったと思うが……。
「おい」
「うお！　キリア！　お前テレビでも見てろって！」
「焦げてんぞ」
「え？　あ！　やべ！」
焼いていた野菜類が少し焦げてしまった。
「……何があったかは知らねぇが、もちっとシャキッとしやがれ」
「なっ」
何があったって……色々ありすぎて困るくらいなんだが。
「セイラのことか」
「ばッ！　違ぇよ！」
「黙れ」
真っ直ぐに眼を射抜かれる。こういう時、キリアの眼力は凄い。
何も言えなくなる。
「……いい加減認めたらどうだ？　少なからず気付いてるんだろ？
お前自身の気持ちは」
「……」
「……意地を張るのは勝手だが、そんなんじゃいつまで経っても強くなれねぇよ」
「……別に、強くなりたいって訳じゃ……」
「いいか。強いってのは単純に、力があるだとか喧嘩が強いとかじゃねぇ。そんなのは俺から言わせればただのバカだ。本当に強い奴ってのは、守りたい物を守れる奴なんだよ。金でもいい、他人から見ればゴミみたいなものでもいい。自分にとって一番大切な物……

お前にとってそれはなんだ？」
「……」
「……お前が最後まで守りたい物……それは何だ」
俺が……守りたい物……。
「……お、俺は……」
北崎？　椎名？　鳴神？　キリア？
率直に言うなら全員だ。俺にとってあいつら全員が大切だ。
でも、その中でも一番……？
「……俺は……！」
そうか……いい加減素直に……自分に正直に……。
ならば答えなど決まっている。

「俺は……キリアを守る！」

「……え……いや……悪い……俺そういうの無理だし……」
引かれた。
「まあ冗談だけどな。そうだな。もう二年だし、いい加減……」
「くっ。ようやく認めたかこのツンデレが」
「うっせー！　ツンデレ言うな！　つかもう飯なんだから準備しろ！」
「わーったよ」
皿を運び、箸を並べていく。
「なんか……お前には助けられてばっかだな」
「くっ。お前なんか助けるつもりはねぇんだがな」
「ひでぇな……」
「何……お前なら、俺とは別の道で強くなりそうだ……」
「お前……なんか変わったな……」
「？　なわけねぇだろいつだって俺の周りは雑魚だと思ってるぜ？」

「いやその認識もどうかと思うが」
実際キリアは変わったと思う。前より話すようになったというか……。
みんな変わっていくもんだな。そう考えると、やっと俺も変われたのかもしれない。
「……何笑ってんだ？　気持ち悪い」
「いや、なんか足枷になっていたものが外れたというか……」
知らぬ内に笑ってしまっていたらしい。憎まれ口を叩かれる。
「明日もあるんだろ？　仕事。さっさと寝ようぜ」
「ああ、そうだな。鳴神も何もないといいんだが……」
「大丈夫だろ」
「え？」
「何があっても……お前が守れ。俺に頼るなよ」
「んー……どうしても無理だったら……」

中等部一階空き教室よ！

さて、文化祭も最終日、三日目である。
天気はまあ、快晴とまではいかないが晴れだし、天気予報も雨は降らないと言っていた。
「さー皆の衆！　今日も頑張っていこー！」
相変わらずのハイテンションでクラスメイトに指示や、チェックなどを済ませていく。
「あーねみー」
「なんだミソラ。今日はお前が眠いのか」
「え？　キリアは？」
「ああ、昨日あれだけ寝たしな。今日は平気だ」
「珍しっ」
「……るせぇ」
「……おはよ」
「おう、鳴神か」
「……ん」
「最終日だし、お前も頑張らなきゃだな」
「……ん」
短い会話だが、一応は張り切っているようだ。ガッツポーズなんてしてみせる。
「さぁーそろそろだ！　みんなー！　頑張ろー！」
時刻は九時。恐らくもう始まっているだろう。
……さて、俺も働くか……。
「ミソラ」
「ん？」
「俺オーダー取らなきゃいけないのか？」
「いやホールですからね？　当たり前だろ」
「めんどい」

もういいや。キリアは無視しよう。
「よし、じゃ皆、今日も頼んだ」
ホール班のメンバーがそれぞれ仕事を始める。……俺もやるか！

「あ、ミソラ！」
「ん？」
「あの、今ミルク切れちゃったみたいで……買い出し班を至急で作ったんだけどまだ届かないからさ。気を付けといて」
「あいよ」
……切れたなんて誰か買い忘れたのだろうか。
「……おいミソラー。アイスティーを二つだと」
「いやさ、俺、オーダー纏める役とかじゃないから。ていうかその仕事で定着しつつあるのは気のせいだよな？」
「気のせいだろ」
「……はぁ。とにかく、本物のオーダー纏める役の北崎に言ってこい」
「えー」
文句を言うキリアを無理やり北崎に引き渡し、持ち場に戻る。
その後も、ホール班のメンバーにミルクが切れている事を伝える。
「ミソラー！　これ５番テーブルにー！」
「はいはい！」
北崎から受け取り、テーブルへ運ぶ。さっきからこの往復ばかりだが、まあ気にしなくていいだろう。
「北崎、ミルクはまだ届かないのか？」
「んー……遅いねぇ。そろそろ帰ってきてもいいんだけどなぁ」
「その買い出し班ってのは誰なんだ？」
「んー？　福原さんとセイラに頼んだよ？」
「……二人？」
「うん。だってそんなに人数割けないからね」

「なるほどな」
それにしても、学校の隣なのに時間がかかるものなのだろうか。
「あーでも」
「どうした？」
「いやさ、他にもいくつか頼んでるから時間掛かってるのかもなー」
「どう考えてもそれが原因じゃねぇか！」
「いやぁ、はっはっは。どしよっか」
俺はそれに答えずに、教室を飛び出していた。
「ってミソラ！？　どこにいるか分かんない敵を追いかけるのかい！？」
敵じゃないだろ。
「ちょっと探して、見つかんなかったら連絡するよ！」
「あっちょ……全く……一人で勝手に行ったりしてー」
後ろで北崎のそんな声が聞こえてくる。……すまん。マジで。
単純に遅れているだけならいいが、キリアから聞いた話もある。
他に何を頼んできたのだろうか。聞いとけばよかったか。
「店に行って居なかったら連絡するか……」
とにかくあの二人を探さないと……。……ん？　二人？
ここにきて致命的なミスに気付く。
……福原さんって誰？　どんな顔？
「ミスったぁぁぁ！！」
重要な項目がぁぁぁ！　別行動してたら分かんないじゃないか！
いやでも！　別行動しているとも限らないし！　探せばいいだけだもんな！　……二人でいれば。
「買い出ししてる店はここのはずだよな……」
もはや可能性だけを頼りに捜索開始。
とりあえずミルクが置いてあるであろう食品売り場から探すか……。
棚の端から順番に見ていく。すると、三列目で鳴神の姿を発見する。

「良かった……二人でいるみたいだな」
隣の人と話しているようだが、背が小さいのか鳴神に隠れて顔までは分からなかった。
「おい、鳴神に福原さん……って、椎名！？」
「ん？　あらミソラじゃない」
鳴神と話していたのは椎名だった。
「あれ？　福原さんは？」
「……ミルクを渡しに先に行った」
ってことは気づかぬ内にすれ違いになっていたのか……。
いや、顔分かんないから見かけても気付かないけど
「……で、椎名は何でここに？」
「ああ、私は生徒会の仕事よ。お茶の葉をね。テレビに出るようなお偉いさんの接待よ面倒くさい……」
「へぇー……。そんな人も来るんだ」
素直に驚く。しかし椎名は握り拳でお怒りだ。
「そんな人達なんかね、いい面してんのは外だけなんだから！　『可愛いねー』って頭撫でやがって！　私は子供じゃないのに！」
「いやそれは完全に子供だと思われてるだろ」
「……緋華李はマスコット」
「うっさい！」
「まあまあ落ち着け椎名。ところで鳴神は何を買うんだ？」
「……ん」
カゴの中を見せてくる。……これで全部ってことか？
「……お金払ってくる」
くるりと回れ右をしてレジに向かった。
「……で、椎名はお茶の葉買わなくていいのか？」
「え！？　ああ、そうね。買ってくるわ。じゃあねミソラ」
「おう」
……さて。
「完全に徒労になっちまったなぁ……」

取りあえず、俺も何か買ってから帰るか。

少しだけ見て回るつもりだったのに……二十分も時間を喰ってしまった。恐ろしき本屋。

とにかく流石に戻らないと色々まずいと思い、手に持っていた本を戻す。

「……ん？　着信？」

時間を確認しようと携帯を見ると、電話で着信があった。合計二件。いずれも北崎だ。

「どうせいつまで遊んでるんだとかだろうな……。戻ったら謝らないと……」

携帯を閉じて急いで教室へ向かった。

「……鳴神がいない？」

「そうなんすよ！　ミソラが居たって連絡してきたから待ってたのに、帰ってきたのは福原さんだけなんですぜ！」

「……」

戻ってきたら北崎は開口一番そんなことを言い出した。

「……まあ、うん。探してくるわ。キリア、お前もだ」

「寝させろよ。面倒くせぇ」

「黙っとけ。さっさと行くぞホラ」

「ちょ、ミソラ！」

北崎が呼び止める。

「ん？　なんだ？」

「……セイラがどこにいるとか分かんの？」

「分からんが？」

「えー。あ、私も探すよ！」

「ダメだ」

「なにゆえ！？」
「お前……このクラスをまとめなきゃだろうが。それなのにここを離れてどうするんだ」
「いやでもそれくらいみんなが何とかしてくれるさ！」
「呆れるほどポジティブ思考だなオイ」
とにかくダメだ、と言って北崎を引き下げる。
「……うし。キリア、お前左だ。俺は右にいく」
「ふん。俺が見つけたら色々面白いことになりそうだな」
憎まれ口を叩いてキリアは左を探し始めた。
「……さて、と。俺も行くか」
自分でも驚くほど焦ったりしなかった。……だから。
「見つけた時はぶっ飛ばす……！」

そう心に決めてから教室を出た。
「……あーもう疲れちゃった……」
生徒会室、その生徒会長である椎名緋華李は自分のイスで伸びをしていた。
「ミソラはホントに無理するのが好きよねぇ……」
セイラの件についてはライカからのメールで大体の状況は掴んでいる。
「あ、緋華李さん」
「ん？　何？」
遠慮気味に入ってきたのは副会長だ。ちなみに緋華李と同じクラス。
「あの、２－５の出し物の予算に狂いがあると……」
「あーまたー？　どうせ嘘でしょ。てことで、頼んだ」
そう言って緋華李は立ち上がる。
「あれ……？　会長見回りでしたっけ？」
「ん？」

扉のところで振り返り、一言。
「少しあのバカのお手伝いをしてくるわ」
そのまま出て行ってしまった。
「……あのバカ……？」
取り残された副会長は呟いた。

やべぇ、やべぇよ。全然見当もつかね。
タイムリミットはないが、余り時間を掛けていては鳴神に危害が及びかねない。
「あー……二人じゃこんな広いところ探し切れねぇ……」
余り人気のないところを回ってみてはいるが、どれも外れだった。
「あと見てないところは……」
手元のパンフレットの地図が描かれているページを見ながら適当に進んでいく。
……いや、待て。何で人気のないところ？　普通は連れ込まれるからか？　……考えてみろ。
「……むしろ、人気の多いところ……？」
小説やマンガでは絶対ありえない。―小説やマンガなら。
「ちっと試してみる……っと」
携帯が震えだした。ポケットから取り出し、確認する。
「また電話か……何の用だよ」
発信者は椎名。
『中等部一階、空き教室よ！』
「へ？」
『だから、セイラの居場所よ！』
「え？　えっちょ、何で？　つかなんで知ってるんだ！？」
『ふっふーん。会長権限でね。少し学校のカメラを使わせてもらっ

てるのよ！』
「うわぁ……」
でかいなー。会長権限。
『ま、嘘だけど。『迷子の子供を探したいので少しの間貸して下さい』って言ったらあっさり貸してくれた』
なるほど。そういう使い方もあるのか。
「悪いな！　えーと中等部一階の空き教室だっけ！？」
『そうよ！　今はまだ無事みたいだから急ぎなさい！　何かあったら覚悟してなさいよ！』
「はいはい！　じゃーな！」
中等部って言うとキリアが探している区域のはずだ。だがさっきの椎名の口振りからして発見は出来ていないのだろう。連絡しとくか。
『……お掛けになった電話番号は、現在電波の届かない位置にいるか……』
「電源切ってやがるー！」
何でだよ！　おかしいだろ！　何のための携帯だよ！
とにかく、こうなっては仕方ないので一人で向かうことにする。
途中でキリアに出会うかもしんないし。

それから、言われた中等部一階に行ってみると空き教室は３つ程あった。どうやら空き教室というよりは机や椅子などの物置みたいになっているらしい。
「どれだよ……」
今更遅いので、見つからないようにしながら一つずつ確認していく。
「……ロッカーやらでよく見えないな……」
教室の中には机や椅子の他に掃除用具、ロッカーも放置されている。ああいう陰でやられては見つかることもないだろう。

「もういっそ開けていくか？　めんどいし　」
その時、二つ向こうの教室から話し声が漏れているのに気付く。
ああ、そういう探し方もあったな。
とにかく場所さえ分かれば簡単だ。真っ直ぐ教室に向かっていく。
『何か言ったらどうだよ？　なあ？』
中から気味の悪い声でそんなことを言っているのが聞こえてくる。
だが、それを気にせず、勢いよく扉を開く！
相手は……三人か。驚いてこちらを見ている。
どうみても不良っぽいのが二人と一見普通の身なりをしているのが一人。
なるべく自信がありそうに、相手を見下すように見据えて第一声を発する。
「どうも。そいつの友達の園山って言います」

有名人

「どうも。そいつの友達の園山って言います」

「……ミソラ……」

鳴神が不安そうな顔で小さく呼びかける、いや、呼びかける訳じゃないかも知れないが。

「……友達？　こいつの？」

三人組の一人が聞いてくる。

「当たり前だろ。お前らと友達になった覚えはねーよ」

「あぁ！？」

ああ、余り刺激しない方がいいんだっけ。一応鳴神も向こうにいるわけだし。

「……あー、まあとにかく。何で今更鳴神に会いに来たんだ？」

「いやまあ、特にこれといって理由はないんだが……。暇でさぁ、で、ここ今文化祭だろ？　ちょうどいいし暇つぶしにでもと思ってな」

何ともはた迷惑な理由だ。まあどうせそんなもんか。こいつら見た感じ学校行ってなさそうだし。

「さて、と。とりあえず、鳴神を離してやってくれない？　まだ仕事残ってるんだ。ていうか既に予定狂ってるし」

「あー悪いな。ちっと今から案内してもらうんだわ。な？」

「……あ……えっと……」

顔など見なくとも、鳴神が怯えているのが分かる。

「どう考えても嫌そうなんだが。ていうか文化祭では自分のクラスの仕事が優先されるからさ」

「うるせぇぞ！　ちっとは黙ってろ！」
気の短い不良は、そう言うといきなり殴りかかってくる。
「危ねっ」
身をかがめてそれを避ける。
「こいつッ！」
奥にいたもう一人の不良も加勢するように向かってくる。
姿勢を低くしたまま、足を払って拳を避ける。
「痛っ！　おい！　桐島！　お前もやれよ！」
どうやら唯一まともそうな奴は桐島というらしい。
「無理だよ。俺セイラ掴んでる訳だからお前らでどうにかしろって。みた感じあんま強くなさそうだし」
「チッ。亮也、一気に片すぞ」
「へいへい」
二人が一旦距離を取る。自分も居住まいを直してから相手を見据える。
出来れば平和的に解決したかったんだが……まあこうなっては仕方ないだろう。俺だけでは倒せずとも、キリアが来るまでの時間稼ぎくらいは出来るかもしれない。
「ぶっ殺してやるよ！」
亮也とか言う男がこちらに走り出す。
向かってくる拳の軌道をしっかりと見て、いなすように腕にぶつける。
続いてもう一人の蹴り。避けようがないので、左腕で腹部を守る。
当てられる度に腕が痛むが、別に腕は使わないのでこれくらい何ともない。
「じゃ、俺の番な」
相手の攻撃が止むと、左腕を下げたまま亮也の腹を蹴る。
「うぐっ！」
いいところに入ったか、亮也はその場にうずくまる。
「桐島！　コイツ普通に強いじゃねぇか！」

「何だよ。そいつが強いんじゃなくてお前が弱いんだろ？」
「何！？」
持ってろ、と言って桐島が不良に鳴神を引き渡す。
「なんでわざわざ俺がやんなきゃなんだよ……」
「鳴神を離せば済む話だろ」
「まぁそうなんだがな……ここまできたらそう言うわけにもいかねぇだろ」
結局こうなるのか……。なんか強そうだよなぁ……。言動とか。
ニット帽で分からなかったが、よく見ると尻尾がある。どうやら獣人のようだ。
「ちっとめんどいし、さっさと終わらせるか……」
桐島がだるそうな雰囲気を纏ったまま、姿勢を低くする。
来る、と思ったときには腹に蹴りが入っていた。
「がっ」
「な？　やっぱそんなでもないだろ」
「そりゃお前……獣人じゃん」
いや、関係ないだろ。と言いながら殴りかかる。
「……殴るのは意味なさそうだな……」
「そりゃ生憎だな」
間一髪、避けきれなかったら顔が変形するところだった。防ぐけど。
「ていうか。なんで、お前、一人で来たんだよっ」
一句一句に蹴りを挟みながら桐島は言う。こちらは防ぐので精一杯。攻撃の糸口なんて掴めない。
どうする。どうやれば、鳴神だけでも助けられる……。
次々と迫り来る蹴りを防ぎながら、状況を打開する策を考える。
「なんでこいつこんなに防げるんだよ。桐島の蹴りって結構速いはずだろ？」
亮也の問いに、攻撃を防いだまま答える。
「そりゃお前、キリアに教わったからな」

「……キリアだと？」
それまで一切緩めずに蹴っていた桐島が攻撃をやめた。凄いなキリア。まさかここまで有名人だとは。
「お前キリアと知り合いなのか？」
「じゃなきゃそんなことしないだろ」
「それもそうだな……」
桐島が頭を掻きながら言う。
「ったくよー。こんな所で再会とかしたくねぇってのによー……なんだってお前なんかが出しゃばってくるんだか……」
そんな時だった。聞き覚えのある声と共に登場してきた闖入者がいた。
「お前……キリアじゃねぇか。久しぶりだな」
「黙っとけ。お前みたいな人間、いや獣人のクズがミソラなんかにつっかかってんじゃねぇよ」
「おい、軽く俺まで馬鹿にしただろ」
なんかってなんだよ。
「どうでもいいだろそんなの。それよりも……」
キリアはゆっくりとこちらに向かってくる。
「ぐわっ！」
キリアはいきなりスピードを上げて、鳴神を掴んでいた男の手を蹴飛ばす。
「ミソラ！　さっさと逃げろ！　仲間が来るかも知れん！」
「え！？　あ、おお！　ここは任せるぞ！」
男が怯んでいるうちに鳴神の手を引いて走り出す。
「教室には行くな！　ほとぼり冷めるまで隠れてろ！」
「了解！　しくじるなよキリア！」
そう言い残して教室を出る。なんで先生には言わないんだろうか。どうせ不良なんて先生を無視してくるんだろうけど。

「……ったく……俺がしくじる訳ねぇってのに……なぁ？」
キリアが桐島に話かける。
「まさか……ここにいたとはな。しかもあんな仲間まで作りやがって……。お前一匹狼気取ってたんじゃなかったのか？」
「気取るつもりはなかったんだがな……。アイツには色々と助けられたからな……。借り作っとく訳にもいかねぇだろ」
「へぇ……気になる複線だな」
「ハッ。終わったらいくらでも話してやるよ」
キリアは相変わらず自然体で、それでいていつでも動けるような重心で立っている。
「桐島……いい加減テメェとはケリつけなくちゃだしな……。まあ、もう勝負は見えてるか」
「ああ、お前の負けだろ？　……はぁっ！」
桐島が姿勢を低くしてキリアに向かう。それに対してキリアは僅かに足を後ろに引いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5969o/

大切なモノ

2011年7月19日03時19分発行